
冬は死にゆく愛の季節

みくも

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

冬は死にゆく愛の季節

【Nコード】

N4482Q

【作者名】

みくも

【あらすじ】

私は仕事をサボって訪れた喫煙室で、門真と出会う。いい男で面白い門真に私は好意を抱くが、彼はどこか謎めいていて……。

1、春はまどろむ夜明けのまぼろし（二）（前書き）

直接的な描写はありませんが、精神的に大人向けかと思われます。
ご注意下さい。

1、春はまどろむ夜明けのまぼろし（一）

彼に触れてみたかった。

体に触れるのは簡単だった。私はベッドに腰掛けて、目の前にひざまずく男の髪に唇で触れた。額に、頬に、顎のラインにキスを落として、最後に私と彼の唇を重ねた。

触れている間、彼は身じろぎもせず黙っていた。ただ瞳に、疎ましげな色を滲ませて。

その事には、体を離してから気が付いた。そしてそれを眼にした刹那、胸の中が締め付けられる。

——ああ、そうだ。

この男が、余りに寂しい事を言うから。
だから私は、彼の魂に触ってみたくなったんだ。

＊

門真^{かじま}と出会ったのは、不思議なくらい最近の話だ。

それは四月の事で、私は少しばかり燃え尽きたような気分だった。この前の月に修羅場の様な年度末の決算を終え、力を使い果たしてしまっていたのだ。これはこの時期、毎年の事だけれども。

何をするのも億劫で、考える事も動く事もしたくなかった。顔の横で、指先に挟んだタバコがどんどん短くなって行く。ああ、もったいない。そう思いながら、フィルターを口に運ぶのさえ面倒に感じていた。

うちの会社は喫煙者が多い。そのため規模の差はあるが、各フロアに必ず喫煙室が設けられている。資料室しかないこの階も同様だ。蛍光灯の青白い光がまばらに照らす地下フロアの片隅に、小さく区切られた小部屋がある。これが喫煙室だったが、ガラス張りなのは上半分だけ。足元は白い壁だ。中で屈めば、外からは姿が見えな

くなってしまう。

そしてその通りに、私は喫煙室の中で見知らぬ男としゃがみ込んでタバコを燻らせていた。

私が来た時にはすでに彼の姿があつて、隠れる様に屈んでタバコを吸っていた。先客は珍しかった。

高校生か。と内心で突っ込んだが、口を開くのも面倒だ。表向きは無言のまま、制服のスカートを調べて隣に並んでしゃがみ込んだ。すると驚くべき事に、もの凄い落ち着いた。

逃げてたからだな。と、あとになって思う。このフロアは資料室しかないので、人がめつたに來ない。来ても、用事を済ませて早々に立ち去る。この喫煙室を使用している人間を、自分以外に見た事がなかった。

そう。氣力の限界を迎えていた私は、最初から同僚や上司を振り切るつもりでここに足を運んだのだ。この心境に、隠れ喫煙はぴったりだった。

しかし、と思う。

私は、そうだ。なら、この男は何なのだろう。やはり、何らかの限界を感じてここにいるのだろうか。

そんな後ろ向きな興味から、すぐ隣で煙を吐き出す男を観察する。三十前後と言うところだろう。後ろに撫で付けた黒髪には、年齢のわりに多くの白髪が混ざっていた。しかし整った顔立ちのせいか、それさえ何だか似合って見える。

ボタンの留まっていない黒いスーツから、胴を包む白いワイシャツが覗いていた。しなやかに、敏捷に動くために鍛えられた体付きが、服の上から窺える。

社員証は携帯していない様だが、どうやらこれは警護課の人間と見て間違いないだろう。

顔だけでなく、体まで仕上がっているのが大変好ましい。こう言う男を見ると、この会社に入って本当によかった、と思う。

「何?」

声に、顔に、不審を隠さず彼が問うた。と言うか、不機嫌に。何故だろう。顔のいい男に嫌われると、余分に悲しい。

確かに、ずっと眺めていたくなる様な男だ。

が、だから眺めてもいいかと言うと、これは別の話になる。見知らぬ女が無言のまま自分をずっと見詰めていたら、間違いなく恐い。気持ちちは解る。解るが、私としてもよく知らない相手に自分の趣味嗜好を吐露した末、精神的に距離を持たれる展開は避けたかった。何とか、この危機を切り抜けなくては。

「髪、染めたりしないの？」

もうちょつと上手くはぐらかせないものかな、と思いながら、それでも心の隅で気になっていた事を尋ねる。

これに彼は、不機嫌な表情を引っ込めて不思議そうに口を開いた。

「髪？」

「まだ若そうなのに、白髪多いと嫌じゃない？」

私は美容師が勧めるまま、少しだけ明るいトーンに染めた自分の頭を指さして言った。

その何が面白かったのか、彼は端正な顔を惜しげもなく崩して笑う。最初に声を掛けた時の、あの不機嫌さは何だったのかと言いたくなる朗らかさで。

驚かされた。こんなに明るい表情で、笑える男だとは思わなかった。

「白髪って、そんなにダメ？ 染めた方が良いかな」

「さあ……」

笑みを残した顔を向けられ、戸惑いながら首を傾げる。

そんな事を言われても、本人はどうなのかと思ったただけだ。私は別に。

「いいんじゃない。色っぽくて」

言葉が自分の喉を離れた瞬間に、耐え難いものが胸の中で破裂した。羞恥だと思う。

すぐ隣から注がれるまじまじとした視線を避けて、両手の中に顔

をうずめる。何なら床に頭突きでもしたい。

ああ、もう。何でこんな事を言ったんだろう。

彼の吐く辛い匂いのする煙が、伏せた頭を掠めて行く。そして聞こえた声はどうも、呆れていたのではないだろうか。

「後悔するなら言わなきゃ良いのに」

仰る通り。

完全に、どうかしていた。

私はこのダメージから回復するのにかなりの時間とカロリーを要したが、それはまあいい。

とにかく私と門真はこんなふうに、どうでもいい感じの出会いをした。

こんな事があって、と言うか。こんな事があったのに、だろうか。以来、門真とはこの喫煙室でよく顔を合わせる様になった。

元々が社内での勤務態度には大らかな会社だったが、こんなに顔を合わせていいのだろうか。心配だ。お互いに。

ここは、いわゆる警備会社だ。

実際の業務に当たるのは警務部で、会社はその性質上、ほぼ彼らを中心に回っていた。

そして更に警務部は大きく二つ、警護課と警備課に分類される。

警備課の担当はビルなどの保安業務に派遣される制服警備なのに対し、警護課の業務は個人の警護だ。

そのために、彼らは制服ではなくノーマルなスーツを着用する。

上着のボタンを留めないのも特徴のひとつで、その下に備えた護身用の武器をすぐ使える様にしているのだそうだ。社員証の不携帯は問題だが、一見して身分が解ってしまうのを嫌い、警務課では持たない者が大半だった。

ちょうど、最近できた私の友人がそうである様に。

「すずサン」

狭い喫煙室の壁際で、しゃがんだまま顔を向ける。と、ドアを閉めた門真が、長身の体を折り曲げて隣に座るところだった。

「ヒマそうだね」

「お互いにね」

言い返すと、彼は愉快げに小さく喉を鳴らして笑った。

私の、しかも下の名を呼ぶのは門真だけだ。

初めてそう呼ばれたのはいつで、何がきっかけだったかは忘れてしまった。わざわざ名乗った訳ではないから、いきなり名前で呼ばれて驚いた事だけは覚えている。

どうして知っているのかと訝って、すぐに思い至る。自分の頸からぶら下がった社員証には、名前と所属が明記されていた。

なるほど。彼らがこれを持ちたがらないはずだと、納得する。

基本的に、私は警務部の人間が好きだ。正確には、どこまでも実用品として鍛え上げられた彼らの肉体が好きだ。

しかそれは、あくまで観賞用と言う意味で。

警務部、特に警護課の人間はなかなか面倒な経歴を持つ者が多く、往々にして人間性がねじれている。

あの部署に限っては、明るく笑い、どうでもいい会話を楽しめる男は珍しい。

その点で門真は、清潔そうな見た目のわりになかなかの軽口を叩く。私も口が減らないほうだから、遠慮が要らず気楽でよかった。

だから出会って程なく、私は門真に対して友情めいた好意を持つ事になったのだ。

1、春はまどろむ夜明けのまぼろし（二）

午後の業務を再開し、すぐに経理を訪れたのは黒い厄介者だった。いや、厄介者と言うのは言い過ぎかも知れない。……知れないが、私は胸の中で重い息を吐いて席を立った。

「どうも」

オフィスの入り口に置かれたカウンターに近付いて、声を掛ける。と、向こう側に立った男はがっかりした様に、黒っぽいスーツに包んだ大きな体でスチールの天板にもたれ掛かった。

「またあんたかよ。たまには若い子に相手させてくんない？」

「いいですよ。脅さないでくれるなら」

ノータ임で打ち返すと、男は「いつ脅したりしたよ」と、人をぎくりとさせる様な低い声を出した。

相手は大男で、しかも恐い顔。この時点ですでに脅しに近いと思うが、無自覚なのだろうか。

「記入お願いします」

カウンター越しに、領収書の申請書類を取り出して渡す。

面倒くさそうな舌打ちを無視し、持ち込まれた領収証をチェックした。

——不可、不可、不可。……最近は、どう考えても業務に関係ない飲み屋の領収証が混ざっていても、まだ可愛いと思う様になって来た。何故、自宅の家賃を経費で落とそうとするのか。そしてまた、落とせると思ふのか。理解に苦しむ。

束になった領収証の約半分を却下して、ため息をつく。

「相変わらずタチが悪いですね、水口^{みずぐち}さん。だから他の子に任せられないんですよ」

いや、実際、警護課の人間は恐い。だからちよつとした無理なら、結構通ってしまうのだ。

向こうもそれを知っているので、水口の様な人間は多い。と言う

か、こんな奴ばかりだ。月末になると、似た様なのがわんさかと経理に攻め込んで来る。

だがこう言う事は男女の差ではなく、勤続年数の長さでもなく、生来の性格によるところが大きいらしい。経理の中で、警護課の男たちと渡り合える人材は少なかった。私がいつも燃え尽きているのは、つまりそう言う訳だ。

「ああー……入社一年目の内気で超可愛い女子社員になりたーい」
この疲れ切った魂の叫びに、門真が隣で激しく咳き込む。

資料室フロアの、喫煙室だ。私たちは揃って屈み、やつぱり隠れてタバコの煙を吐き出していた。そもそも人がいないんだから、普通にしてもよさそうなものだが。

「どうした、いきなり」

「ちよつとね、自分の性格を呪ってるのよ」

門真は更に困惑したふうに、私を見た。

「すずサンも、色々あるんだな」

「まあね。気の毒だと思うなら、領収書は早めに持って来て」

ついでにささやかな願いを吐き出すと、門真は「覚えとく」と小さな笑い声を立てた。

そこでふと、思い当たる。

私は、門真の領収書を見た事がない。

彼は比較的人当たりがいいから、他の人間が処理したのだろうか。可能性はある。だがそれは何だか、残念な事の様に思えた。

領収書だけじゃない。私は、ここ以外での門真も見つた事がない。

同僚とはどんな話をして、食堂のランチは何を選ぶのか。どんな字を書くのかも見た事がなかったし、携帯電話の番号どころか色さえ知らない。

例えば偶然エレベーターで、私と会ったらどんなリアクションをするのかな、とか。考えてみれば、解らない事だらけだ。

「門真、仕事してる？」

隣の男を見詰めて問うと、心外そうに眉を上げた。

「してるよ。すずサンが見てない時に」

そりゃそうだろう。

そりゃそうなんだけど、ちょっと思っただけだ。この喫煙室にいる教師の眼を盗む高校生みたいな門真じゃなくて、ちゃんとしたところも見えてみたかった。

「だって、幽霊みたいじゃない」

「俺が？」

「ここ以外じゃ会わないし、ここ地下だし。あれでしょ。お日様の下に出たら、溶けるでしょ」

子供みたいな冗談を言って、声を揃えて二人で笑った。

あア、でも。――と。

笑い声のあとで、門真が呟く。

「良いね、幽霊。気楽そうで」

もつとちゃんと、見ておけばよかった。

幽霊なんか羨む顔を、見ておけばよかった。

けれども私は何も気付かずのん気なもので、幽霊が人間になるのは難しいけど、人間が幽霊になるのは簡単なんじゃない。気力さえあれば。そんな軽口を叩いた。

そして、珍しい事に。

下らない会話でへらへらと笑う私たちの前に、初めて三人目の客が現れた。

喫煙室のドアを手荒く開き、軽く息を弾ませた男が飛び込んで来る。

「やっと見つけた！」

恨みがましく喚いた顔に、見覚えがあった。

騒々しさに少々驚かされたあと、どうやら彼は門真を探しに来たらしいと気付く。複雑な気分だ。彼らは仲がいいのだろうか。だとしたら、問題だ。

自分の息子に素行のよくない友達ができてしまった時の母親。私の心境は、多分それによく似ている。

現れたのは相模さがみと言う、警護課の人間だ。二十代半ばの男で、人懐っこい見た目に反し、やはり人間的にねじれている。

どうしよう。

ここはやはり恨まれても、わが子の将来を思う親心で二人の友情を裂くべきだろうか。

心の中で子育てについての葛藤をくり広げていると、硬い声が耳を打った。

「うるさい」

たったひと言、不快げに。

それを耳にして、自分でも意外に思う程どきりとした。はっと顔を向けると、まるで最初に会った時の様な門真の顔がそこにある。

あの時の態度は、私が挙動不審だったせいだ。そう、思っていた。親しくなってみれば、普段は朗らかに笑う男なのだと。

……違うのだろうか。

さっぱりと整った門真の顔に、硬く不機嫌な表情は似合うと言えば似合っている。笑顔よりしかめっ面が似合うと言うのも、考えてみればなかなか不幸な話だ。

すっかり解らなくなつて、その横顔をぼんやり眺めた。私が知ってる彼ではなく、こちらが本来の門真だとも言うのだろうか。

そのためかどうか。きつく言われた本人は、余り気にした様子もない。相模は唇を尖らせて、ぶうぶうと文句を言った。

「嫌なら、消えないで下さいよ。オレだって好きじゃないんすよ、走り回るの」

「もう良い。行く」

「……へえ！」

捜しに来たのは自分の癖に。門真が素直に立ち上がると、闖入者はどこか感心したふうな声を出した。それから今見付けたと言う感じで、急に足元で屈む私に眼を移す。

「柴町しばまちさんっすよね、經理の。意外だなー。二人、仲イイんすか」
新しいおもちゃを手に入れた、悪ガキの様に。言った相模の顔は、

妙に輝いていたかも知れない。

よく解らない。私が返事をする前に、彼は喫煙室から強引に退去させられたからだ。

相模の頸を掴み、エレベーターに押し込む。その門真の眉間に深い皺が刻まれて、更に不機嫌さを増して見えた。

安心した。あのぶんなら、相模のねじれた人間性に気付いてない訳ではないだろう。彼らの間に、引き裂くべき友情はなさそうだ。だからすっかり油断していた。

私は後日、改めてこの妙な男と対峙するはめになる。

「柴町さん、一緒にどうスカ」

軽薄な声が聞こえた時には、もう肘の辺りを掴まれていた。

意味が解らない。

腕を掴む手と、掴んだ相模の顔を見比べる。何のつもりだろう。

一緒にいたはずの同じ課の後輩は、私と私の腕を取るスーツの男から素早く距離を置いた。彼女たちを、責めはしない。何故なら自分自身、逃げたいからだ。

腕を持たれて、バランスが取りづらい。私は両手で持ったトレイを傾けない様にしながら、一応の抵抗を試みる。

「一緒に食事する程、親しくないでしょ」

「親しくなりたいから、一緒にごはん食べるんじゃないスカ」

ああ、この男も口が減らない。

すでにうんざりした私をよそに、相模は人懐っこい笑顔を見せる。解るよ。見ているぶんには可愛いし、食堂に居合わせた女子社員が軽く蕩けているのにも気が付いた。彼はもてる。でも同時に、社内では有名な人でなし。

見ているだけならいい。けど今は彼との距離が近過ぎて、せつかくの笑顔にも危機感が募るばかりだ。

1、春はまどろむ夜明けのまぼろし（三）

相模は、私から昼食の載ったトレイを取り上げた。片手にそれを持ち、残った手で私を引き摺る。

ああ、嫌なのに。一応、抵抗してるのに。

私たちが通ったあとには、倒れた椅子や斜めに歪んだテーブルが散乱している。抵抗の爪痕だ。

警務部の中で言えば、相模は細身のほうだろう。だがさすがに、私なんかでは掴まれた腕をほどけない。つまり彼の希望通り、一緒にお昼を食べる事になった。

食堂の窓際で向かい合わせ、ではなく、丸いテーブルへ直角に座る。斜め前に相模の横顔が見える位置だ。

一緒に食事をしている以上、何か会話をしなくてはと思ったのだろうか。相模はずっと喋っていたが、話題は恐らく唯一の共通点である門真について。しかも、ほぼ全て私に向けての質疑応答形式。

相模、その気遣いは本気で余計だ。

結局どの質問に対しても「さあ」や「解らない」としか答えられず、この人でなしに呆れられると言う耐え難い恥辱を受けた。

斜め前から、奇怪なものでも見下す様な眼を向けられる。

「ほんつとに何にも知らないんスね」

こちらは一方的に付き合わされている被害者に過ぎないのに、この言い様は酷くはないだろうか。

まあ、事実だけれども。苛々としたものが、胃の辺りから込み上げる。そんなに門真の事が知りたいなら、本人に聞けばいい。

「知らないわよ。悪かったわね」

口喧嘩なら買ってやろう。

少しばかりそんなつもりで、私は高圧的な口調を作る。けれども相模は、それを予想外の態度で、予想外の語句を使って受け流した。「や、イイんじゃないスカ。あのひとは、そんなトコが気に入って

るみたいだし」

けろりとした横顔が更に苛つく。

何を言ってるんだろう、こいつは。気の毒に、長い筋肉生活のせいで、頭の中まで筋肉になってしまったに違いない。

気に入ってるって何だよ、この馬鹿。

色んな意味で頭を抱える私に、相模は食後のコーヒーを傾けて淡々と言う。

「さっさと気づいてやって欲しいんスよね、オレとしては。めんどうなんで」

「何がよ」

「……ほんと、早いほうがイイッスよ」

最後に向けられたその顔と台詞は、何かを憐んでいたかも知れない。

＊

窓から入り込む風が、微かな初夏の香りを感じさせる。春が終ろうとしているのだ。

空気そのものが瑞々しく輝き始めるかの様なこの時期が、私は大嫌いだ。

『いい加減、自分の年も考えなさいよ?』

受話器から聞こえるのは、耳慣れた母親の声だった。刺す様な言葉が耳に痛い。ついでに、胃まで痛い気がする。

せっかくの休みだから、気が済むまで寝てやろうと思っていたのに。朝早く鳴った電話をうっかり取ったら、これだ。一瞬にして眠気が吹っ飛ぶ。

ふとんから這い出して、壁のカレンダーにちらりと眼をやる。忘れてた。

「母さん、私の誕生日まだなんだけど」

『知ってるわよ。誰が痛い思いしたと思ってるの』

あんた、誕生日に絶対電話出ないじゃないの。

そんな小言の始まった受話器から耳を外し、ため息をつく。

『聞ってるの？ あんたもう、二十九でしょ。ちゃんと考えないと』
何を考えるんだろう。

ふとんの上から腕を伸ばして窓を開くと、涼やかな風が頬を撫でた。

ひとり暮らしの狭い部屋で、首を傾げる。ちゃんと仕事して、ちゃんと生きてる。母親にはいつまでも子供に見えるかも知れないが、私はちゃんと社会人として生活しているのに。

またひとつ歳を重ねたと言うだけで、どうして否定されなくてはいけないんだろう。

私には解らない。

煙と一緒に、重い息が零れた。

それを門真が聞き咎め、私の頬に視線を注ぐ。

母の電話から、二日が経つ。地下フロアの喫煙室に隠れるのはいつもの事だが、今日はサボリじゃない。ちゃんと昼休みを利用して、隠遁している。

それにしても今日程に後ろ向きな精神状態も珍しい。大嫌いだ、こんなイベント。

「門真。誕生日、いつ？」

視線は正面の壁をぼんやり見詰め、隣に屈んだ男に問う。興味があつた訳でもないのに、ついポロリと質問が零れた。

いきなり何を言い出したのかと、訝りながらも返事がある。

「ずっと先だな」

「嬉しいものよね、誕生日って」

「いや、一年で一番嫌いな日だ」

タバコの銘柄はマルボロに決めてる。

それくらいの何げなさだったので、私は一拍遅れ、それからゆっくり隣に眼を向けた。

「嫌いな？」

「あア」

「よかった」

われ知らず呟いて、最初は自分の口から声がもれた事にも気付かずにいた。そうと知ったのは、門真が驚いた様に眼を向けたからだ。その視線に、私のほうが息を詰める。

まるで、心の底まで覗き込もうとでもするみたいだ。深い闇色の、心細げに揺れた瞳で。

「……何が、良いんだ？」

「私も、嫌いなよ。自分の誕生日。でもそう言うと、みんな解んないって言うの。それか、ちょっと怒っちゃったりしてね」

どうしてそんな事言うの？

傷付いた様に責められて、困り果てた覚えがある。

そんなの知らない。当たり前前みたいにおめでとうって言われても、自分で嬉しいって思えないだけだ。

そんなに罪深い事なのだろうか。生きる意味も知らずにいるのに、何がおめでたいんだろうって思ってしまう。

まあ、三十近くなったら、誕生日は憂鬱らしい。また歳を取るのかと。けれどもただ単純に、自分の誕生日が嫌って人間もいる。こんなふうだね。多分、珍しいだろうけど。

だからこそ私は驚いて、そして薄い喜びが胸に広がるのを感じていた。

「大抵、否定されるのよ。そんな事ないでしょ、って」

こちらを覗き込むみたいに見下ろす門真を、逆に私は見上げて笑う。

きっとだらしなく、ふやけた顔をしていただろう。仕方ない。そんな気分だったのだ。

「似た様な事言う人に会うと、嬉しいわよね。仲間みたいで」

堪え切れず、小さな声を立てて笑った。何だかもう、いいや。落ち込むのも馬鹿馬鹿しい。

実は全然よくないのだが、例えるならゴールの見えないマラソン

コース。前にも後ろにも人影がなく、私はたったひとりで走っている。自分の足音と、上がる息。そして体の内側を、ドンドンと叩く心臓の音。まわり付きののは、泣きたくなる様な静寂だ。

そこへ見知らぬ誰かが不意に現れ、自分が躓いたのと全く同じ場所を躓いた。それを、間近で目撃してしまった感じ。

私はきっと一瞬呆けて、それから大笑いするだろう。笑ってから、大丈夫？　なんて言って、手を差し伸べる。

強く手を握って、その人と出会えた事に感謝するのに違いなかった。

マラソンコース、ではない。ここは喫煙室で、誰も躓いて倒れてはいない。

でも私は、すぐ隣にしゃがみ込んだ大柄な男に対し、握手を求めて手を差し出す。

「よろしく」

門真は不可解そうなものを眉の辺りに浮かべたが、それでも私の手を握り返した。そしてその顔のまんま、ぼそと呟く。

「まア……。俺も、仲間がいて嬉しいよ」

いい奴だ。全く納得してない感じがひしひしと伝わるのに、話を合わせてくれてありがとう。

それがおかしくて、小さく笑い声を上げた。すると門真は手を離しながら、ふと思いついた様に口を開く。

「だけど、急にどうしたんだ」

「ああ。今日が誕生日なのよ、私。それで調子出なかったんだけど、元気になったわ」

昼休みはまだ二十分も残っていたが、勢いよく立ち上がって背筋を伸ばす。何かもう、大丈夫。

じゃあね、と声を掛けて仕事に戻ろうとする私の、制服のベスト。ウエストの辺りに付いた小さなポケットに、すんとわずがな重みが滑り込んだ。

眼をやると、黒い袖に包まれた手が離れて行くのが見えた。首を

傾げてポケットを探ると、冷たいものが指先に触れる。銀色の、オイルライター。これには見覚えがあった。いつも、門真が使っているから。

「誕生日は嫌いでも、プレゼントは好きだろう」

屈んで低い位置にある男の顔は、どこかいたずらな子供めいていた。

返事に困る。凶星だ。

と言うか、素直に凄く嬉しかった。

銀のライターは傷だらけで、きつと長く使われて来たのだろうと窺える。執着心の薄そうな門真が、珍しく長年にわたって愛用したのだ。わざわざ買った品物ではないけれど、それが余計に嬉しい気がする。

「門真」

お礼を言わなきゃ。

そう思って名前を呼ぶが、向けられた顔を見たらそれじゃ足りない気になった。しゃがみ込んで煙を吐き出している男には、きつと私の喜びは半分も伝わらないのだろう。

それじゃ駄目。

ただの気まぐれだろうと何だろうと、彼のした事が私と言う人間をどれだけ幸せにしたか。それを解らせたい。

「門真、一度しか言わないからよく聞いてね。私、門真の事、コンビニ限定超豪華贅沢ティラミスより愛してる」

間違いなく、これは私に取って最大級の贅辞だった。……だったが、結果として、伝えたい相手には一ミリたりとも伝わらなかった。コンビニの棚に贅沢ティラミスがないと、私がどれだけ落ち込むか。

気分を害したのかと疑う程に怪訝な顔で見上げる門真に、残りの昼休みを全て使って熱く説明しなくてはならなかった。

2、夏は嵐に乱れる心（一）

夏は苦手だ。

春も憂鬱だが、暑いと単純に生命の危機を感じる。

それでも、夏の夜は好きだ。乾上がる様な陽射しが消えて、ひっそりとした暗闇にわずかにぬるんだ風が吹く。それを肌で感じるのが好きだった。

だがそれは、もう少し先の話になるだろう。今はまだ梅雨が明け切らず、雨のやむ気配さえないからだ。

その癖に気温は高く、寝苦しい。絶える事のない雨音と、就寝中はエアコン不使用のポリシーのせいで眠れない日が続いていた。

この夜もそう。明け方まで苛々しているくらいなら、もういつそ起きよう。そしてコンビニで涼もう。ほぼ腹立ちまぎれにそう決めて、ふとんから抜け出すとTシャツに薄いパーカーを羽織った。

開いた傘の下、濡れた道路をスニーカーで踏んだ。湿度のせいで空気が重い。それでも肌が夜気に触れると、反射的にほっと息が零れた。

出て来たばかりだと言うのに、戻りたくないなあ、なんて、頭の隅に思う。

実はここ数日、部屋にいても落ち着かない。離婚間近の家庭じゃあるまいし、ひとり住まいの家に帰りたくないなんて、どうかしてる。

……いや、理由はよく解ってる。ただ前向きに考えるより、何とか逃げ切りたい気持ちで一杯なだけだ。

二階建てのアパートを離れたら、車が一台やっと通れる幅の道路。曲がったり分かれたりした道は、街灯がぽつぽつと照らすだけ。塀や建物の隙間には細い抜け道が幾つも抜けるが、その中は影に沈んでほとんど見えない。

コンビニを目指して道を行く。小道のひとつを通り過ぎ、濡れた

アスファルトを踏む足がぎくりと止まった。

何か、見た気がする。

大人の肩幅程の路地。眼の端で捉えた、その暗い空間の中。解ってる。本当は、そのままそつと立ち去るべきだった。でも、立ち竦んでしまった。真夜中と言う心細さ。恐ろしさが足元から全身をやわやわと毒し、反して同時に正体を確かめたいと本能の様に願う。

落ちて来る雨粒に鈍く震える傘の下、ときどきと騒ぎ始める胸を押さえた。恐怖か、期待か、もう解らない。闇に凝らす眼に、薄く輪郭が浮かび上がった。

寝苦しい陽気とは言っても、雨はまだ冷たいはずだ。暗い中でうずくまった人影は、それを避けようもしない。

正直、私には真つ黒な固まりとして見えるだけだ。けれども逆に、あちらからはよく見えるだろう。まばらとは言え、電柱にくっ付いた街灯が道の上を照らしている。

影の中に潜むそれも、私の存在に気が付いた様だった。はっと頭を上げるのが気配で解る。

大人の、多分男だ。彼は私の姿に、雨音の中でも聞こえる程に大きな息を吐いた。

私は、首を傾げる。

ため息はやたらとのんびり耳に響いて、何だか微妙な気分になった。

ほっとした様な、それとも呆れた様な。いや、もしかすると、がっかりしたのかも知れなかった。納得行かない。

人の顔を見て、その反応はどうなの？

一瞬の内に腹を立てたが、すぐにそれどころではなくなった。彼が、口を開いたから。

「すずサンか……。こんな時間に、何してる？」

それは、まるっきりこちらの台詞だった。

その呼び方。そしてその声。

私は慌てて駆け寄って、傘を差し向けながら顔を寄せる。

「そっちこそ何してるのよ！」

——門真だ。

余りに驚いて、私の口調は叱り付けるみたいになった。

まあ、ちよつと。なんて言いながら、濡れ鼠の男は乱れた髪を掻き上げる。

門真。それは全く、何の説明にもなってない。

こんな夜中に、全身ずぶ濡れの男が道端でうずくまってる。余裕で通報されるレベルだ。必死で釈明すべき場面なのに、言葉を濁してどうする。

「何？ 馬鹿なの？ 帰りなさいよ」

「家は、ちよつとね」

不都合があるらしい。何だろう、家賃滞納で家を追い出されたのだろうか。

つい、経費で家賃を落とそうとした社員の顔が思い浮かんだ。ない話ではない。

「じゃあ、会社は？ シャワー使えるし、着替えくらいあるでしょ」

「会社も、ちよつと」

一体何をやらかしたんだ、門真。

家も駄目、会社も駄目。あれか、手配犯か。膝から崩れそうになるのをどうにか堪え、触った端から雨水の染み出すスーツを掴んだ。ここで、放って置ける訳がない。

「家、会社から近過ぎない？」

「通勤時間長いと駄目なのよ、私」

そんな会話をしながら、無駄に大きな体を自宅アパートのドアに押し込む。

ずぶ濡れの門真を玄関に立たせ、タオルを投げ付けてから彼のために着替えを探した。が、どうしろと。私の部屋に、男物の服なんかあるはずない。

できれば熱いシャワーでも使わせたかったが、夜中だし、ここは

二階だ。

諦めたほうがいいだろうと考えながら、パジャマ代わりにしている大きめのTシャツとジャージを手振り返る。

そうして、悲鳴を上げそうになった。

「――あア、見た目ほどの傷じゃないよ」

服からしみ出た水溜まりの中に立ち、自分の体を見下ろして言う。言葉も出ない私の様子に、門真は初めて自分の状態をかえりみたと言う感じだ。

それは嘘だろうと、責めたくなる。

黒い上着を脱いだ彼の、その下で白いはずのワイシャツが左半身を赤くしていた。

血の色だ。シャツの肩が裂けている。

「病院」

しばらく呆然と見詰めたあと、やっとそれを思い付く。とにかく、医者だ。そう思った。

だが門真は、眉をひそめる。

「いや、もう構わないでくれ」

何だそれ。

その顔をじっと見上げて、考えてる事はちっとも解らなかった。解る訳ない。何を言っているんだろう、この男は。

構わないでくれ？

淡々と、硬い声で。迷惑そうに眉をひそめて。

それはさ、要らないって事？ 心配するのも、迷惑って事？

突き放された。そう感じた。

ぶつきたい言葉は幾らでもあるのに、どれも喉に引っ掛かって出て来ない。

結局何も言えず、買い物に行くと理由を付けてアパートから逃げ出した。

そして私は今、コンビニの明るい店内で男性下着の前に立ち尽くしている。

門真のために必要だ。買わなくてはならない。と言うか、これを買うためにここにいる。が、サイズが解らない。確かめるのを忘れたと、結構前に気付いてはいた。だけど何だかもう、指一本動かしたくない。

果たして本当に、いいものだろうか。門真と言う人間をこれっぽっちも知らない私が、下着の購入と言う極めてプライベートな領域に関わっても。どうだろう。趣味と言うものもあるのだろうか。ねえ。どうよ。

下着の棚を見詰めて、延々とそんな事を考えていた。

まあ、意味の解らない迷宮で完全に迷子になっているが、私なりに落ち込んでいたのだ。

ちよっと仲がいいと思っていた相手を、心配しただけだ。それを迷惑がるのもびっくりだが、自分に対してぞっとした。

相手がどう思ったって、私には関係ないはずだった。なのにどうして、こんなにショックなんだろう。

心のどっかで、期待していたのだろうか。私は見返りを、期待したんだろうか。

その考えは、酷く浅ましいものと思った。

きつと、門真に私は必要ない。そんな事は当たり前だ。お互いにいい大人だし、私たちは他人なのだし。

それが今になって痛いのは、多分、私のせいなんだろう。

……やっぱり、どこかで期待したのだ。

喫煙室で顔を合わせるだけなのに、まるで秘密の共有者みたいに。いつの間にか、特別な友達みたいに思っていた。

彼に取っても私が特別ならしいと、そんなふうに期待したんだ。

これは私の勝手な失望。

門真の罪じゃない。――でもね。それはともかく、思うんだよ。だからって、本当に私が悪いのか？

パーカーのポケットから携帯電話を取り出して、自宅の番号をコールする。当然と言うか予想通り、誰も出ない。三回目のコールで

留守電に切り替わると、発信音のあとに私は大きな声を張り上げた。

「門真一、ぱんつのサイズ教えろこらっ」

他にお客はいなかったが、レジにいた店員が眼を丸くしてこちらを見た。まあいい。私は今、ちよっと切れてる。主に常識が。

ためらう様な間を置いて、電話の向こうの返事があった。

『……すずサン、今どこ？』

「コンビニ」

『恥じらいって言葉、知ってる？』

「知ってるよー。あれでしょ。昔の古代日本人は大体使えたって、噂の超能力でしょ。おばあちゃんに聞いた事あるよ」

適当に答えながら、カゴの中にスイーツを投げ入れる。

知人が血みどろだったらさ、心配するのは当然だと思うのよ。人として。それを理解しないあっちのほうが、確実に悪い。絶対そう。人格に重大な問題があるに違いない。

責任転嫁気味に決め付けて、私は甘ったるい商品をどんどんカゴに詰め込んだ。

カロリーが必要だ。自宅で待ち受けるノーパン馬鹿男に対抗するために、必要なのだ。

2、夏は嵐に乱れる心（二）

ん？

ドアを開けた瞬間、首をひねる。すっかり重たくなったコンビニの袋と、畳んだ傘を両手にさげた格好で。

「おかえり」

「あ、ただいま」

普通に言われたので、つい普通に答えてしまった。いや、それよりまだ。

スニーカーを脱いで部屋に上がると、私はまず電気を付けた。私が出る前は付いていたから、門真が消したのだろう。

部屋の中に明かりが灯り、また驚く。固定電話の載った、棚の傍そこで床に座った門真は、まだ着替えていなかった。濡れたスラックスに、上は裸。脱いだワイシャツで剥き出しの肩を押さえている。止血だろうか。

「何で真っ暗なの？　て言うか、何で着替えてないの？」

言ってから、下着を待っていたのかなと思ひ当たる。

この部屋はそう広くないが、キッチンと、ほぼ寝室のリビングに分かれている。門真と私が腰を下ろすのは、キッチン側のビニールコーティングされた床だ。フローリングらしきものを模したつるつるの床の上に、コンビニ袋の中身を広げる。

男物の下着を探し出して門真に渡すと、彼は戸惑った様にそれを見詰めた。

「……あア。何でサイズ聞かれたのかと思った」

「そんなマニアックな変態じゃないわよ、私は。あっち行ってるから、着替えてよ」

隣室に行こうと立ち上がって、ふと床に落ちたタオルに気付いた。落ちた、と言う表現は多分、正確ではない。それは綺麗に畳まれて、脇によけてあったから。

アパートに門真を上げて最初に、投げ付ける様にして渡したタオルだ。使われてない。私は訝しいものを感じながら、それを拾う。

「髪、拭いた？」

「良い」

何がいいんだ。

逃げそうになる門真の頭を捕まえて、無理やりにガシガシ擦る。

タオルはすぐに冷たく湿り、重く水を吸った。

手が掛かる。子守りでもしてる気分だ。

「風邪ひくでしょ、ちゃんとしてよ。ほら、着替えて」

「……汚すから」

着替えを胸に押し付けると、門真はそれを困った様に見下ろした。
ん？

私は再び、首をひねる。

何だよその、今更な遠慮は。

「パジャマにする様な服だから、汚れても別にいいの」

「ここにいてだけで、迷惑掛けてる。これ以上は甘えられない」
んん？

何か今、人間らしい言葉を聞いたぞ。

足元の男は、すっかり冷えた裸の肩をしょんぼり落とし、眉根の寄った顔を横に逸らす。まるで、意地を張った子供みたいに。

「んん〜？」

今度は、こちらが眉間に皺を寄せる番だ。それも、腕組み付きでこの反応は、予想外だ。だって迷惑がってるのは、門真のほうじゃない。突き放したのは、そっちでしょ。

構うなど、門真は言ったのだ。私は心配してるのに、そんなものは要らないと。

でもだとしたら、反応としてこれは妙だ。

私は恐る恐ると言う感じで、腕を組んだまま腰を屈める。

「……門真、あのさ。私、今、もの凄い心配してるんだけど」

「何で。何の心配？」

ふと曇って見上げる顔に、全く他意は見えなかった。私は床に手を突いて、がっくりと崩れる。

そっちなー！

「えッ、すずサン、大丈夫？」

門真は表情を驚きに変え、私の肩に慌てて手を置く。

ああ……、解った気がする。

ぐわんぐわんと眼が回り、少しばかりの痛みさえ覚える頭で全てを悟った。

あれは、拒絶じゃない。ただ、理解できなかったただけだ。心配されるという事が、門真には思い付きもしない事だったのだ。

無頓着にも、程がある。

「私に心配掛けてるのはあんたよ、門真」

「何で俺を？　すずサンが？」

解らない。そんなふうに、男は眉を歪める。

どうして解らないのか、私にはそっちのほう解らない。呆れ半分に、ため息が零れた。

「するのよ、普通。知ってる人間が道端でびしょ濡れになってたり、血染めのシャツを着てたりしたらね」

しかも門真は、その条件を両方満たして目の前に現れた。だから私は今、通常の二倍で心配してる。さあどうだ。反省しろ。

恩着せがましく主張して、二本の指でピースサインの形を作った。目の前に突き付けられたその指に、門真はうっと思を詰める。そして口を開閉しながら言葉を探しあぐねた末、飲む様に息を吸って頭を下げた。そしてひと言。

「ごめんなさい」

よし。

勝った。

「で、どうするのよ」

少し前に夜が明けて、そろそろ出社しなくてはならない。問いなから頼張るのは、昨夜コンビニで買い込んだ食料だ。

だが通勤服に着替えた私の前には、Tシャツとジャージ姿の門真がいる。そのシャツの下には、真新しい傷。昨日ベタベタと絆創膏を貼った時に見た限り、血管は無事の様だ。傷口から鳥ささ身的なものが覗いていたが、出血はもうない。

普段は後ろに撫で付けた長い前髪が顔に垂れ、彼の瞬く睫毛をくすぐっていた。

「留守番してるよ」

「ええー。よく解らない男ひとりで家に残しとくの嫌なんだけど」
三個目のおにぎりからセロファンを剥がしつつ、つい本音を零してしまった。

いや、信用してないとかじゃなくてね。確かに、凄く信じてるとも言い難いが。自分がいないのに自分の部屋に誰かいると思ったら、落ち着かないじゃない。

それは至極常識的な心情のはずだったが、門真は私を見ようともせずふっと笑う。

「まともな女みたいな事言うなア」

人の横でぐうすか熟睡してた癖に。

遠い眼で言われて、ぐっと喉が詰まる。確かに、気付いたら朝だった。

あれ。もしかして私、やらかした？

二の句が継げずにいる私の肩へ、門真はバッグを斜め掛けに持たす。幼稚園児か。そう突っ込む前に、ドアの外に放り出された。

「行ってらっしゃーい」

軽く見送られて、心中は複雑だ。

何だか、ニートの男と付き合ってる気分。ちょっと幸せ。目の前は暗い。

私もね、そんなに馬鹿じゃないのよ。

近過ぎない？ 門真がそう言った通り、アパートから徒歩十分で会社に着く。この立地が恐らく昨夜、私が門真と偶然会う事になった一因だろう。

会社の制服に着替えるため、いつも通りロッカールームに足を向けた。廊下の先に目的のドアが見えた辺りで、黒い人影が横からにゅっと現れる。

「相模くん」

反射的に、その名を口にしようとした。

けれども相手は声を出す間も与ずに、私を抱える様にして手近の男子トイレに引き摺り込んだ。

「それなりの理由があるんでしょね」

個室に押し込まれ、後ろ手に鍵を閉める相模を見上げる。

私の作った不機嫌な顔に、年下の男は薄っぺらな笑顔を返す。その下に、ひやりとしたものが見える気がした。

「ええと、カドマさん？ あの人どこにいるか、心当たりとか、ないッスか」

「何で私に聞くのよ」

「知ってそうなの、あとは柴町さんだけなんスよ」

他は探し尽くしたと言う意味だろう。思わず、ため息が出た。

馬鹿じゃないつもりだから、考えてはいたのだ。

どこにも行く場所がなく、負傷しているのに病院を拒む。そんな人間は、完全にトラブルど真ん中に違いない。

そして相模が探していると言う事は、仕事絡みと考えるべきだ。

要人警護を担当する警護課は、特に危険が多いと言われている。

「知らないわよ。何かあったの？」

つんと顔を逸らしてとぼけると、相模は眇める様に眼を細めた。

こんな状況でなければ、ほほ笑んだのだと勘違いしたかも知れない。

「柴町さんは、めんどろくにクビ突っこまないひとだと思ってましたよ」

「そうよ」

「じゃ、何かあったかとか、訊いちゃまずいでしょ」

「……そんな事、聞いた？」

心臓が跳ねる。驚きの余りに開いた口を、手の平で塞いで呆然と

相模の顔を見た。

普段なら、絶対にそんな事は聞かない。厄介な話には関わりたくない。

でも今は、自信がなかった。無意識に口走ったとしても、無理もないとさえ思う。実際、知りたかった。

門真に何があって、彼はこれからどうなるの。

「ま、ついでにでも、もう出てきて大丈夫って伝えてもらっというて
イイツスカ」

「だから、知らないってば」

「ウソ、意外とヘタツスね、柴町さん」

うん、意外とそうなのよ。

2、夏は嵐に乱れる心 (三)

『すずサン、自炊って知ってる？』

「知ってるよー。あれでしょ、自分の蔵書を電子書籍化する作業でしょ」

門真が私の家から私を送り出し、相模に伝言を託された日の午後だ。携帯を鳴らした自宅からの電話は、まずこんなふうに始まった。まあ、相手は門真しかいないのだが。冷蔵庫に発泡酒と冷凍食品しか入っていないので、どうなっているのかと言う問い合わせだ。

昼休みを終え、地下の喫煙室から仕事に戻るところだった。資料室のフロアでエレベーターを待ちながら、ごによごによと言いつつ探す。どうと言われてもね、しょうがないじゃない。料理ってね、才能だと思ふのよ。

それからふと思い出して、相模に頼まれた通り、ついでに彼の伝言を伝えた。出て来ても大丈夫と教えたのに、しかし門真は「ああ、そう」と素っ気なく電話を切った。

やはり、何かがあったのだろうと思う。

この日は朝から社内の空気がぴりぴりしていて、警護課の黒っぽいスーツが慌ただしく走り回っていた。

「どうしたんですかね」

私と同じ制服の瀬尾せのおが、隣のデスクから不安そうな顔を向ける。彼女は入社四年目だが、こんな空気を感ずるのは初めてのはずだ。彼女より先輩の私だって、初めてなんだから。

「昨日、本部長が襲われたらしいですよ。未遂で済んだそうですけど」

何事だろうかと瀬尾と頭を寄せ合っていると、のん気な声が物騒な内容で降って来た。慌てて顔を上げる。

「何でそんな事知ってるの、内村くんうちむら」

「警務の同期に聞いたんです」

椅子の上から見上げると、内村はスーツに包んだ体を反らす。薄い胸板の上で、社員証が揺れた。

「自慢そうな顔しないの。警務部の内部情報なんか、聞いちゃ駄目でしょ」

先輩として、新人の不心得を叱る。彼はこの春入社したばかりだ。内村はもちろんだが、その同期とやかも軽率過ぎる。

人命を預かる彼らの職務は、情報ひとつが仕事の成否に関わりもする。だから警務部の中には、情報の管理及びリサーチ専門のチームまで設置されている程なのだ。

私たち一般職の社員は、それに触れるべきではない。これは自分が新人だった当時、先輩から教わった不文律だ。内村を見ていると、明確に規則化すべきだと本当に思う。

しかしまあ、彼が仕入れて来たのはえらい話だ。本部長が襲われたとあっては、黒服たちが殺気立つのも無理はない。

ここでは、本部長は社長を指す。本社と呼ぶべきところを、本部と言うからだ。これには少し理由がある。

警備員を常駐させた、支部と呼ばれる施設を都市部に点在させている事がひとつ。それらをまとめるのが、郊外寄りのこの本部。

そしてもうひとつの理由は、わが社が藤白グループふじしろに属していると言う事だ。

各分野に数多くの傘下企業を持ち、藤白一族が経営を務めるのが藤白グループ。それら全ての頂点に位置するのが「本社」だ。このグループ傘下にあつては、他を本社と呼ぶ事はない。

慣例として、本社のトップは統轄と呼ばれる。当然ながら、統轄の地位には藤代家の当主が就く。血筋のよさか教育の賜物かは知らないが、名門藤白一族の経営者たちは実際すこぶる優秀だそうだ。

今期の初め、この本部では大幅に人事が改められた。その最たるものが本部長の交代で、前任者は本社の役員となった。代わりにその任を引き継いだのが、藤白統轄の息子だ。

——と、話を聞いた。藤白一族は秘密主義で、名前以外は余り表

に出てこない。この本部社員でさえ、本部長の顔を知っているのは秘書と警護担当者くらいのもだろう。

しかしさっきの話を聞いたら、それが必要な処置なのだと納得する。実際に、彼らは襲われる危険があるのだ。

未遂で済んで、本当によかった。これで本部長に怪我でもあったら、うちの会社は役に立たないと潰されていたかも知れない。

「ね、まさか本部長襲撃に失敗して逃亡中とか言わないよね」

お願い、違うって言って。そんな願いを込めて問うと、門真は白玉を片手に怪訝な顔で振り返った。

「違う」

「じゃあ、何でまだ隠れてるの」

もしかすると、もういないのかも知れない。仕事を終えて帰宅しながら、そんなふうに思ったりしてた。なのに部屋に帰ってみると、門真は当然の様な顔で台所に立っている。

うちの両親は共働きで、私は子供の頃から鍵っ子だった。ひとりで暮らすずっと前から、帰る家はいつも無人だ。だから恐る恐る開いたドアの隙間が、クーラーの冷気を漂わせるのが不思議だった。

おまけにぶんぶん回る換気扇の下から「おかえりー」なんてのんびり言われて、思わず玄関で両膝を突く。

私とは違い、相模は事情を知っているはずだ。彼がもう出て来ていいと言ったなら、門真が隠れている理由はない。はず。

なのに、何でまだいるんだろう。

「隠れてない。買い物行ったし」

ことごと煮える鍋から視線を外さず、門真が答える。言われてみればそうだ。冷蔵庫には発泡酒しか入ってない。現在調理中の食材は、門真が買い出しに行ったはずだ。

でも、だとしたら余計にややこしい。

「外歩けるんだから、帰ればいいじゃない。何でこんな所で料理なんかしてるの」

「世話になったから、恩返し？」

……へえー。

その返事を聞くと、急激に考えるのが面倒になった。何かもう、いいんじゃない。本人が望むなら、気が済むまで機織りでもすればいいじゃない。

もはや彼が追われる身ではないと言う状況もあり、おいしそうな匂いの漂う部屋で私は何かを諦めるに至った。

「すずサンさ、結婚するの？」
ん？

バッグを下ろして上着を脱ぎ掛けた背中に、唐突な質問が浴びせられる。ぎこちなく振り返ると、あちらも背中を向けていた。そのでっかい後ろ姿を油断なく睨みながら、めまぐるしく考えを巡らせる。

何でいきなりそんな話を。

三十近い独身女子に、結婚の話題ってタブーなんじゃないの？
ねえ。

と言うか、それは私が、ここ数日避けて来た話題ではないだろうか。そのために電話だって常に留守電にして、相手を確かめてから取る様にしていた。

そこまで考えて、はっと部屋の電話に眼を移す。伝言ありのライトが点滅していた。

『すず？ 母さんだけど、写真届いた？ 届いたら届いたで電話しなさいよ、ほんとにもう。お見合いの日取り決まったら、また電話するから。ちゃんとしなさいよ』

母の伝言を聞き終え、私は悄然と頭を垂れて台所に立つ。くすんだシンクに手を置いて、心の底から懇願した。

「忘れて下さい……！」

ガス台はすぐ横だ。その前でTシャツの肩に口を押し付け、門真は声を殺してクツクツと笑った。

見合い写真が届いたのは数日前で、誕生日から三週間と言う時間差があった。それが母らしい。歳の話はもういいかな、そんな油断

が生まれる頃合だ。

これが届いてから眠りは浅いし、部屋にいても落ち着かない。もう、本当に大変なんだ。

そんな熱弁を振るいながら、門真の作った料理を食べる。

正直に言うと、おいしかった。女の子の手料理を食べて、結婚に憧れる独身男の気持ちがちよつと解るくらいに。こんな実用的な特技があるとは、びっくりだ。

座卓を挟んで、床に座った。ひとり用のつもりで買ったテーブルは少し小さく、並べられた料理の皿は窮屈そうだ。

向かい合わせに座る門真は、私のどうでもいい話にもよく笑った。合間、長い前髪が鬱陶しいのか、何度も髪を掻き上げた。黒にまぎれる白い髪が眼に付く度、どきりとする。やっぱり、色っぽい。

髪のせいか、門真のせいか。解らないまま、妙に落ち着かない気持ちになる。不快ではなかったが、胸の底で何かが破裂しそうだった。

あとになって思う。私が感じていたのは多分、幸福と呼ぶべきものだった。

馬鹿なつもりはなかった。

だけど私は、馬鹿だった。

夜になり、門真がアパートを去る。それが終わり。翌日からは以前の日常。

うやむやだ。

問い詰める事はできなかったと、やはり今も思う。けれどもせめて、私はもっと考えるべきだった。

どうして門真が負傷したのか。どうして門真は姿を隠そうとしていたのか。

考えるべきだった。

私は彼を知らない、気付いていたはずなのに。

3、秋は色付く果実の誘惑（一）

ああ、この事かあ……。

ぐったりと抱えた頭の中には、相模の顔が浮かんでいた。いつだったか向けられた、憐れむ様な、呆れ果てた様なあの顔。

精神の安定を求めてタバコが欲しくなったが、着慣れた制服のポケットは空だ。秋の気候には支障ないが、ベストを着たきり上着さえない。

何でこんな事に、と思ったところでまた思考が元に戻る。

そうね。さっさと、気付くべきだった。

「あれの恋人？　これが？」

これ、と言うのは私の事らしい。

随分な言い回しだが、それに構う余裕はなかった。気を抜いたら、腰砕けになりそうで。

私が連れて来られたのは、立派なビルの、上のほうにあるオフィス。

奥の壁が一面ガラスで、その前に大きなデスクがこちら向きに置いてある。広い室内には応接セットが用意されていたが、上等そうな革張りのソファは素通りした。

大柄な男たちが両側から私を挟み、ドアから真っ直ぐデスクに向かう。そこに座っているのは三十代半ばの、銀フレームの眼鏡が冷たげな印象の男だ。

と、デスクの前に到着した私に、まず浴びせられたのが「あれのこれ」発言だ。机の向こうでゆったりと椅子に腰掛けた男に、さつと近付いて薄いファイルを差し出す人がいる。岸本きしもとと呼ばれていた、四十近い秘書の男性だ。

銀フレームの男は、よく見れば端正な顔をしていた。こんなオフィスで、しかも秘書付き。立派な肩書きもあるのだろう。女子として、そう言う男は大好きだ。だけど、ちっとも心がときめかない。

彼は何か、冷た過ぎた。

ぴくりとも動かない眉の下、紙に落とされた眼が不意に私を見た。そして手の中のファイルを、こちらに向ける。

「説明する手間が惜しい」

読め、と言う事だろう。

立ったまま、それを受け取る。ぱらぱらと流し読み、薄いファイルの中程で手が止まる。そこには、私と門真の写真があった。

ファイルの内容は、私についての調査書だ。本籍地、現住所。家族構成に、学歴、職歴、素行に評価。交友関係、過去の交際歴。それが前半。後半は、私と門真についての事だ。

写真が多い。喫煙室に並んで屈んだ私たちの写真は、端に行く程奇妙に湾曲していた。広角レンズの特徴だ。狭い場所でも広い視野を得られるその特殊レンズは、隠しカメラに使用されるらしい。

貼り付けられた写真の下には、簡単な説明と日付の記載。春頃だった。私が門真と出会ったのは。ほとんどその頃から、最近までの写真が揃っている。

しかしとどめを刺したのは窓の外から狙った構図の、私の部屋で門真と二人で食事をしている場面の写真だ。それが眼に入った瞬間、バシンと乱暴にファイルを閉じた。血の気は引くのに、顔が熱い。羞恥で泣きそう。

噂で聞くと、プライバシーは法律で保護されているらしい。なのに、これは何だ。

あれは夏の初め、ずぶ濡れの門真を拾った時の一回だけだ。それが何で、ばっちり撮られてしまっているのか。

何より、この写真が一番恥ずかしい。私のために作られた食事を、一緒に食べた。きっと普通で、何でもない事なんだろう。でも、沁みる様に幸せだった。

誰にも明かしてないその胸の内を、覗き見られた気持ちになる。奇声を上げて耳を塞いでしゃがみ込むか、思い切り走って逃げた。そんな心境だった。

「厄介だろう、あれは」

私を追い詰める本人は、こちらとは温度差激しく淡々している。その声に、頭を抱えながらもぐっと踏みとどまった。

彼が「あれ」と呼ぶのは二度目だが、今度は酷くどきりとした。

それは、誰の事を言っている？

「統轄の実子でありながら、疎まれ続けた人間だ。誰も信じず、誰も認めない。柴町。君はどうやって、あれの心に入った？」

「……そんな人は、知りません」

「君が門真と呼ぶ、あの男だ」

デスクの向こうを見る。冷たく光るフレームの奥で、もっと冷たい眼は伏せられていた。視線はデスクの上に落ちていたが、意識はもっと遠い所にある様に思えた。

彼を、藤白^{こうせい}洸成と言う。

その名前なら、私も知ってた。藤白グループ統轄の長男で、「本社」専務。その彼が、門真を統轄の実子と言った。それは、彼らが兄弟と言う意味ではないだろうか。

今の話と、この状況をまとめる。現統轄に、子供は二人。ひとりが洸成、もうひとり^{りゅうせい}は流成だ。それはつまりうちの本部長で、そしてどうやら門真の事らしい。

洸成の顔を、改めて見詰めた。確かに、整った顔ではある。門真もだ。だけど、似ているとは思えなかった。タイプが違い過ぎる。

それに、彼が門真について口にする時の声。表情。寒さにひび割れるみたいだった。本当に、兄弟なのだろうかと疑いたくなる。

「柴町様、そちらをお預かり致します」

首を傾げていると、岸本がうやうやしく手の平を見せていた。

私は何も持たずにここへ来た。持っているのは、さっき渡されたファイルだけだ。それは今、無意識に組まれた私の腕でぐしゃりと無残にひしゃげている。

思わず謝りそうになったが、ちょっと待て。これは私の個人情報だ。

「これ、今すぐ燃やしたいんですけど」

まあ、駄目だろうなと思いつながら言うが、意外にもあっさり了承される。「サーバーにデータが残っている」と言う落ちだ。

ぐったりと、頭を抱えた。

「私の事なんか調べても、しょうがないですよ」

「そうでもない」

ギシ、と椅子が軋む。洗成はデスクに肘を突き、頬杖の様な形で自分の顎を撫でる。その手の下で、唇が薄く笑んだ。

錯覚かと思う程、うつすらと。けれども私は、この人に笑顔と言う機能が搭載されていた事に驚いた。最近の冷血漢は、ハイスペックらしい。

視界の端で、岸本が頭を下げる。洗成とも、私とも違う。入り口のドアに向けてだ。それで、誰かが訪れたのだと解った。

「すずサン」

私は、ドアに背を向けていた。だからその声は、後ろから聞こえた。ゆっくりと、瞬く様に。目蓋を閉じ、そして開く。その間に飲んだ息を、零さない様に唇を噛んだ。

振り返る前にちらりと見ると、頬杖を突いた洗成がこちらをじつと見上げていた。意外だとも言いだけに。

背後の男に向き直り、腰に手を当てる。

「助けに来るの、遅いんじゃない？」

どれだけ恐くて、どれだけ緊張したと思ってるの。

開口一番、門真を責める。

てっきり少し困り顔で、謝ってくれると思っていた。門真が悪い訳じゃないけど、秘密があったし、原因はどうやら彼だ。

が、返事はない。門真はスーツに包んだでっかい体で、開いたドアにもたれていた。疲れた様に頭を傾け、細めながらに向けた眼は私ではなく洗成を見る。それが不穏で、空気が痛い。

確かに、門真だ。門真だけど、門真じゃない。こんな男、私は知らない。

部屋の中には私を連れて来た男たちが残っていて、数歩の距離を取りながらドアに体を向けていた。牽制の様に。それは多分、入り口の向こうに黒い人影が幾つも見えるためだろう。そのひとつは、相模だった。

「久しぶりだ」

「顔が見たかったワケでもないでしょう」

洗成の掛けた声に、門真はそんな返事をした。反感を滲ませた顔のまま、視線を兄から私に移す。

「行こう、すずサン」

ピリピリした声に言われて、内容を理解するのに時間が掛かった。手振のない催促に、一拍遅れて足を踏み出す。だが、辿り着けはしなかった。

ドアに向かう私を、大きな手が掴んで止める。すぐ隣に立っていたのは、洗成だ。高級そうなスーツの胸に、引き付けるふうにして肩を抱かれた。

こっちは、パニックだ。腕の中から息を詰めて見上げると、その顔はほほ笑んでいた。ふわりと、楽しげに。

「迎えにまで来るとは」

「うちの社員です」

「それだけか」

洗成は私の手から、潰れたファイルを取って投げた。それは大理石の床を滑り、ドアの傍で革靴の先にトンとぶつかる。

門真は自分の足先に落ちたそれを、拾い上げはしなかった。写真が剥がれ、紙の間から飛び出している。足元を見下ろすだけで、どう言う事なのかを悟った様だ。

「……友人です」

「苦しいな」

「アンタには関係ない!」

かっと荒げた声が、門真の口から飛び出す。まるで知らない男みたいで、嫌だった。

しかし、洸成は笑みを深くする。満足げに、それが望みでもあった様に。

一周回って、あっけに取られた。

「本当に、ご兄弟なんですか」

「相容れない肉親もいる」

「なら、離して下さい。門真が嫌ってる人に、触られたくない」
言って、びくともしない胸を押す。

相手が藤白統轄の息子だとか、本社の専務だとか。気が遠くなるくらい偉い人だって事を、この時の私は綺麗さっぱり忘れていた。それに多分、恐い人だって事も。

男は観察でもする様に、銀フレームの奥で眼を細めた。そしてきつとペンより重いものは持たない手で、私の前髪を払う。

そのまま指先で頬に触れ、顎をなぞり、ひとつにまとめた髪を乱す様に手の平でうなじを包む。やはり手は、冷たかった。

顔が近付く。

その意味を理解できなくて、私は眼を見開いたまま藤白洸成の唇を受けた。

3、秋は色付く果実の誘惑（二）

意外な事に、そのキスは熱かった。

片手を腰に絡め、もう片方の手でうなじを捕まえられている。スーツの肩や胸を叩いても、大してダメージはない様だ。

唇を柔らかくに噛まれた時、ドンと激しい衝撃があった。

門真が、洸成を突き飛ばしたのだ。それと同時に、奪い取る様に私を捕えた。

「洸成様、その辺りで」

ピリリと緊張した空気を割って、岸本がするりと間に立つ。続いて双方の護衛たちが体を入れて、藤白兄弟を離れさせた。

門真の腕の中で、ぼんやりと首を傾げる。何が起きているんだろう。そして何故、私とその真ん中にいるんだろう。

洸成は腰でデスクにもたれ、腕を組んで冷笑を浮かべた。噛み付きそうに睨む門真と、対照的だ。

解ったと思った。それを眼にして、瞬く様に。

ああ……この人は、何でもする。門真を傷付けるためなら、何だって。

熱いと思った唇は、きつと憎悪に炙られていた。

洸成の、最初の言葉を思い出す。彼は私を、門真の恋人だと考えていた。最初から、道具に使うつもりだったのだ。

実際、門真は怒っている。洸成の望んだ展開だろう。

しかしそれは、あくまで彼らの話だ。

私は、どうなる？

ここに、私の意志はない。勝手に連れて来られて、勝手に道具にされた。

「門真、門真」

ちよいちよいと手招きして呼ぶと、しかめっ面がこちらを向いた。それを見上げる格好で、すかさずネクタイを強く引っ張る。

下りて来た顔にキスした瞬間、門真は痛い程の力で私を掴んで引き剥がした。二歩、三歩。あとに下がりながら、信じられないものでも見る様にこちらを凝視する。

そのリアクションに多少むっとしつつ、私はくると振り返った。そこには、山程の男たち。黒いスーツの中に相模を見付け、にっこりと笑顔を作る。無理めの経費を上司に認めさせる時だけの、特別な笑顔だ。

なのに彼は眼が合うと、ビクリと小さく飛び上がった。素早く胸倉を掴もうとするが、相模は身軽くひよいひよいと逃げる。

身の危険を察知したらしい。

「何で逃げるのよ！」

「や、冗談じゃないツスよ。オレ意外と身持ちカタいんで」

恐らく、彼の予想する通りだ。唇を奪うつもりで追い掛けている。

いいじゃん、別に。男が、キスくらいでガタガタ言うんじゃねえよ。胸の内で毒を吐き、じりじりと隙を伺う。すっかりわれを失っていたが、感情を抑えるつもりもなかった。

結構いい顔をしてるのに、洗成にキスされても見事に全く嬉しくない。人格に問題があり過ぎる。しかも、門真の恋人と言う前提さえ誤解だ。

こっちは、心がぐしゃつとなりそうなのだ。鬱屈を発散するため、誰かに可能な限りの迷惑を掛けたい。

「落ち着け、すずサン！」

「お願い、離して！ 記憶を薄めたいの！」

慌てた門真に羽交い絞めにされ、ぎゃあぎゃああと訴える。それに屈折の深さを感じたらしく、彼らは説得を諦めて強硬手段に出た。

門真と相模は目配せして頷き合い、それぞれ私の頭と足を横抱きに抱える。そして後ろも振り返らず、だっと駆けてその場から逃げ出した。

いいのか、門真。

思いつ切り敵前逃亡してるけど、さっきまで一触即発だったじゃ

ん。

「ほんつとメチャクチャッスね、柴町さん」

走り出した車の中で、助手席から相模が言う。ルームミラー越しに送られる視線は、呆れ果てたと言う感じだ。

確かにそれは否定しないが、こいつに指摘されるのは納得行かない。相模の癖にと、後部座席から言い返す。

「意外と普通の事言うのね」

「フツーですよ、オレは」

「普通の男は、女の子使い捨てにしないの」

してないッスよ。そんな軽い相模の言葉に、車内の空気がざわりと揺れた。隣で門真が、思わずと言うふう顔に顔を上げる。しかも運転手まで、一瞬助手席に視線を振った。

あんたは上司公認の人でなしだよ、相模。

「オレは、ちゃんとみんなスキでしたよ。スキ過ぎて、殺したくなるくらい」

鏡の中で、彼は薄っぺらにへらりと笑う。

「けっきょくオレらはぜんぜん別の生き物で、寝ても抱いても、どうしても透き間が埋まらない。スキになったらただだけ、それが許せなくなるんスよ。全部欲しくて殺したくなるから、その前に別れてるだけッス」

相模、それはやっぱり普通じゃない。

少なくとも私は、そんなふうに人を愛した事がない。恋愛って、心が満たされるものだと思ってた。欠ける事も、あるのだろうか。軽い気持ちで出した話で、意外な本心を見てしまった。これからは、人の恋愛観に口出すのはやめよう。自分に誓うと同時に、あんなるほどと腑に落ちたものがあつた。

相模は以前私に、門真の事を早く気付けと忠告した。事実を知って思ったのは、あんな言い方じゃなくて、もっとハッキリ教えってよ。と言う事だ。

何しろ、人間の情を解さない享楽怪獣相模だ。この繊細な女心を、

理解できる訳がない。

でも、違う。逆だ。

相模は知っていたから。秘密が、心と心の距離が、どんなふう
に人を傷付けて苦しめるか。知っていたからこそ、あんなほめかす
様な事を口にしたのだ。

ねじれた人間性を持ち合わせた彼にしては、上等過ぎる程の氣遣
いと言える。

「相模くんは、本部長の警護担当なのね」

今更ながら、思い当たった。門真が藤白の人間で、警務部の社員
でないなら。相模が周辺にいる理由は他にない。

重く長いため息が、思わず口から零れていた。沈黙の中に落ちた
それに、門真はふと傷付いた様に瞳を揺らす。

「……ごめん、すずサン」

巻き込んで？ それとも、黙っていて？

謝罪の意味は解らなかったが、ため息で責めようとした訳じゃな
い。単純に疲れた気分だったただけだ。

何を考えているか知りたくて、隣を見詰める。けれども急いで逸
らされた顔は、窓の外しか見ようとしなない。

だから、今度は本当に責める様な口調を作った。

「そうねえ。拉致されるのなんて初めてだから、緊張しちゃった」
声にすると、しみじみ異常だ。

藤白洸成は——彼の命令と言うのは本社に着いてから知ったが、
私を連れ出すために強引な手を使った。屈強そうな自分の部下をこ
れでもかと送り込んで、私を経理のオフィスから力尽くで引き摺り
出したのだ。

あんな事をしたら、話はすぐに本部長まで届いたはずだ。わざと
だろう。洸成の目的は、あくまで弟だ。

アスファルトの上で回転するタイヤの音と振動が、少し遠く微か
に伝わる。その中で門真は、息を詰めて眉をひそめた。私の態度に、
胸が潰れそうだとも言いたげだ。

余りに期待通りで、小さな声を立てて笑った。

「すずサン？」

「いいわよ、もう」

ちゃんと迎えに来てくれたし、秘密を恐れたのは私も同じだ。

座席のシートに思い切りもたれて、車の天井を見上げる様な格好になる。自分のずるさを白状するのは、ちょっと苦しい。

「私だって、恐かったよ。門真が知らない人になったみたいで、きつともう今までと同じ様にはできないって思った。それが凄く、恐かったの」

動揺しなかったと言えば、嘘になる。秘密を知ってから門真の顔を見る前に、私は飲んだ息を噛み殺した。気付かれたくなくて。これまでと、これからと、何も違いはないと思いたくて。

そして、解ってしまった。

門真、あんたはどんなに孤独だったろう。

真実を明かせばきつと全部変わってしまうと、知っていたのは彼だけだ。

どうしようもない寂しさが、夕暮れみたいに胸の中を染めて行く。薄氷の様に脆く壊れる絆の上で、それと承知で、どんな気持ちで隣にいたの。

「もう、今までとは違うな」

「そうね。とりあえず私、門真じゃなくて藤白って呼んだほうがいい？」

茶化して問うと、門真は恐いくらい真剣な眼で私を射抜く。視線は心まで見通す様で、いつそ本当に見せられたらいいのと思う。

最初から門真が藤白だと知っていたら、多分こんなふうには言えなかった。きつと身構えて、親しくなんてなれなかった。でもさ、門真。私たちは、もうそんなじゃないでしょ。

「名前なんか、どうでもいい。名前で好きになったんじゃないから。私が友達だと思ってたのは、顔がよくて面倒くさくて料理が上手な、……あんただよ」

今すぐ気持ちを言わないと、全部消えてしまう気がした。嘘じやなかった部分まで、消えてしまう。

ただ楽しくて、ただ優しくて、ただ好きだから。

門真を失うのが、嫌なんだよ。

3、秋は色付く果実の誘惑（三）

問題になるのは、藤白家が余りに名門過ぎると言う事だ。そこにあるのは覇権であり、名声であり、どろどろに相食む骨肉だ。

門真は、門真が本名なのだと教えてくれた。

彼は正式には藤白の籍には入っておらず、ただ統轄の実子として役職に就くため藤白の姓を名乗っていると。

「じゃあ、藤白兄は？」

「あっちは、統轄の奥サンの子」

だから藤白洸成が正式な名前だと、煙を吐きながら門真は言った。相変わらざる喫煙室で、すぐ隣に屈んだ顔を眺める。

引っ掛かる言い方だ。更に浮かんだ私の疑問を、彼は無言の内に察して答えた。

「こっちの母親は、生まれてすぐに子供を父親に売りつけるような女だよ」

それ以上は聞けなかった。

……でも、少しでも触れた気がする。氣遣われると言う事を理解せず、向けられる好意を認めない。自分さえ信じない門真の心に。藤白の血に取って、それらは全て裏に利害が隠れるものだ。母親でさえ、彼の価値をそんなふうにしかなかった。

欲に溺れて、人は狂う。

叩き込まれる様にして、幼い頃から門真はそれを知っていた。

ずっとひとりで耐えた孤独は、精神的にどれ程の苦痛を強いただろう。身内からも、疎まれて彼は。

それは真綿で絞める様に心を蝕み、呼吸する意味さえ解らない暗い場所。

そんな時、この喫煙室で自分よりも疲れ果てた女に出会った。

そいつは意味の解らない事を口走る上、門真の事を知らないからか遠慮がない。つまりそれは私の事だが、誰かに対して面白いと思

ったのは初めてだったと、最近になってポツリと聞いた。

藤白洗成の件から、何週間かが過ぎていた。私たちは結局のところ相変わらずで、休憩時間には閑散とした資料室の片隅でぷかぷかと煙を吐いている。

「すずサン、もうちょつと気イ使つてよ。本部長だよ、俺」

「やだ、解ってないの？ ほどばしってるでしよ、氣遣いの嵐が」これが最近の持ちネタだ。

実のところ、一般事務職と本部長では接点なんかほとんどない。実は凄く偉い人でした。そう言われても、実感も湧かず緊張が続かなかったのだ。

だから門真は油断して、私は浮かれる様にほっとしていた。

覚えているのは、会社からの帰り道。

すっかり暗くなった道路を、ポツポツと照らす街灯を頼りに歩いていた。足音はしなかった。少なくとも私は、氣付かなかった。

夜道には、私だけだ。人がいないなら、まあいいだろう。そんなつもりで足を止めると、銀のライターを持ちながらタバコをくわえようとした。

――が、できなかった。

人の手がタバコと顔の間にするりと入って、私の口を塞いだからだ。誰が。塞ぐ手を引つ掻きながらもがいても、びくともしない。せめて背後を確かめたいが、身をよじる事もままならなかった。

そうする内に別の手が伸び、強引に服の上から針を刺した。ギクリと、反射的に体が強張る。注射器だ。針の先から押し出される薬液が、腕を内側から圧迫して行く。何を注射されたのか、目眩の様に視界が揺らいだ。

その間、そいつらはひと言も言葉を発しなかった。必要がなかったのだ。きっと全て予想通り、予定通り。

女とは言え、大人相手にこの手際はただ事じゃない。手馴れていると言っていだろうか。

こんな事をこんな奴らにさせるには、ある程度の条件がある。ず

ばり、金と権力。

私に、心当たりはひとりだけ。目が覚めたら、藤白洗成と再会する事になりそう。そんなふうに思いながら、朦朧と薄れる意識を手放した。

＊

「誰？」

これは目覚めて最初、口を突いて出た言葉だ。

兄じゃないじゃん。

スプリングの弾力を背中を感じ、寝転がった状態で首をひねった。まず眼に入っただのは、こちらを見下ろす人影だ。それは女で、高そうな服を身に着けている。どうやら好意的と言いたい顔は、全く覚えのないものだ。

ホテルの一室らしい。それも安くはなさそうで、サイドテーブルや傍の椅子は飴色の木目が美しかった。窓を隠すカーテンは二重でレースの内側に上等そうな厚い生地が垂れている。そのために外の様子は解らないが、どうやら空は暗い様だ。

長い巻き髪を揺らしながら女が離れ、手近の椅子に腰掛ける。それを追う様に起き上がりとして、自分の状態にやっと気付いた。体の前で、両手を拘束されている。冷たい手錠、ではないが、それに近い。これは一度締めたら切らなきゃ取れない、プラスチックの結束コードではないだろうか。

「ええー……」

「貴方の、どこが好いのかしら」
解らないわ。解りたいとは思わないけど。

どうやら、会話するつもりはないらしい。彼女はひとり言をこちらに押し付け、ベッドに座った私を不快げに見る。ラインストーンの輝く長い爪が、組んだ腕を苛々と叩いた。

洗成の件から、一ヶ月も経ってない。この短期間で、二度目の拉

致とは。この国はどうなってしまったのか。

呆れ半分、なげやり半分。短く息を吐く。

室内の明かりは、ベッドサイドのランプだけだ。シェードを通った橙の光があたたかに、しかしほの暗く周囲を照らしている。

驚く程の広さはないが、それはここがベッドルームだかららしい。大きなドアの向こうに、続き部屋がある様だ。

……人生初スイートが、拉致監禁。思わず、どす黒い自嘲が浮かぶ。

リビングに続くドアの脇に、黒っぽいスーツで揃えた男たちの姿。肩幅に足を開き、両手は体の前で軽く重ね合わせている。何かあれば、素早く対応できる様に。

私を警戒し、彼らを置いている可能性もある。だがこの場合は、彼女も護衛を身近に置く立場の人間と考えるべきだろう。

眼を、椅子に腰掛けた女に戻す。

きつめのメイクと服装で解り難いが、若そうに見える。二十をやっとひとつ二つ越えたかどうかだ。似ているとは思えないが、あの兄弟だって相当似てない。

拘束された手を、ベッド脇に伸ばす。

「あなたも、藤白の人？」

問いながら、サイドボードに載った薄いファイルを取り上げる。思った通り、洗成の所で見せられた私についての調査書だ。

燃やすつもりだったのに、あの時はファイルを置いて来てしまった。その実物は私がくしゃくしゃにしたが、これは綺麗なままだ。

そう言えば、サーバーにデータが残っていると聞いた気がする。ならこれは、それ元に新しく作った物だろう。

こんな言い方をするると容易に入手できる様に聞こえるが、データにアクセスできる人数は限られるはずだ。「本社」の情報が手に入り、護衛の付く立場は少ないと思う。

質問に女は、不機嫌に答えた。

「だったら、なに？」

「だったら、動機は門真でしょ？ 用なら、本人に言って貰えると助かるんだけど」

一応の提案をすると、彼女は驚いた様に、同時に怒った様に眉を上げた。

「はあっ？ 統轄の息子と付き合ってるくせに、無責任ね！ 恋人として特権が与えられる分、リスクも覚悟すべきだわ！」

「いや……。別に恋人じゃないし、特権もないんで」

ああ、でも。と、ぼんやり思い出す。

前に拉致された時、洗成も持っていたその誤解を否定する暇がなかった気がする。それにうっかり取り乱し、門真にキスした。人前で。おまけに帰りの車中では、好きだとさえ口を滑らせたなあ……。思い出せば思い出すだけ、何なんだこの女はと自分で思う。どうしよう。て言うか、この辺りをスルーした門真が信じられない。

穴に埋まりたい気持ちになって、ベッドの上に突っ伏した。その後頭部に、容赦ない声が降る。

「そんな言い訳信じゃないわよ」

まあ、そうなるよね。

でもこっちは、羞恥心が体の中で暴れ回ってる。シーツにぐりぐり頭をすり付け、無実を訴えた。

「本当なんだよー、信じてよー」

「ちよっと、ねえ。もっと緊張感持ちなさいよ。馴れ馴れしいわ」「向いてないと思うんだー、人質」

何しろ、恋人じゃない。もし仮に恋人だとしても、何を引き換えにできるだろう。だって、私だ。大したものにはなりそうにない。いや、それとも。——と、もうひとつ可能性がある事に気付く。ベッドで横になったまま、顔を向けて椅子の上にいる女を見上げた。

「門真が好きで、門真が欲しいとか？」

なら、邪魔な女を排除しようとする理屈は、解らなくはない。倫理的に問題がある上、誤解だけど。

私の言葉に、しかし彼女は酷い侮辱を受けたとでも言いたげに喚いた。

「失礼ねっ、いらないわよ！」

「じゃあ、何？」

「本部長を退任してもらうわ！」

何だそんな事かと、拍子抜けした。

いや、秤のもう一方に載るのが私だと考えれば、大き過ぎる代償だ。しかしそれは、一般論としての話。本部長のポストは、門真が望んだ訳ではないと聞いている。

「いけるでしょ。頼んでみた？」

「あんな男に頭を下げるなんて嫌っ！」

ノータイムで首を振り、激しく拒絶した姿に私は笑いたくなる程の感銘を受ける。

何だかこの子、嫌いじゃないなあ。

4、冬は死にゆく愛の季節（一）

「ねえ、名前何て言うの？」

「自己紹介する誘拐犯がいると思うの？」

呆れた人ねと軽蔑の眼を彼女は向けるが、顔をさらした誘拐犯もいないと思う。私が海にでも沈むなら、話は別だが。

「藤白一族だって解ってるんだし、いいじゃない」

「うるさいわね。好きに呼べばいいでしょ」

冷たくあしらわれ、寂しさを覚えた。こっちは人権を犠牲にして付き合っているのに、それはないのでは。

「その服、どこの？」

「プラダだけど」

「解った。じゃあ、プーちや……」

「あやこ絢子よ！」

即座に叫ぶ。

素直な反応で、本当に嬉しい。

「絢ちゃんはさー、門真とどう言う関係？」

「血縁以外の関係はないわ！ 妙な言い方しないで！」

何がそんなに気に入らないのか、彼女はギャンギャンと暴れて栗色の巻き髪を振り乱す。

藤白兄と言い、絢子と言い、どうしてこう敵意を燃やすのか解らない。絡む以外に、門真の構い方を知らないのだろうか。

「まあ、いいけど。それで、門真辞めさせてどうするの？」

「流成はどうでも好いわ。大事なのは本部長の席よ」

「あー……。本部長になりたいんだ、絢ちゃん」

「ひとまずはね。一応の肩書きでも、手に入ればさっさと上に行けるもの」

どうして当たり前の事を問うのかと、そんなふうに訝しげな眼を向けられる。

そうか、こんな可能性もあったのか。洗成の事が頭にあったせいか、目的は門真本人なのだろうとどっかで思い込んでいた。

「小市民には、よく解らないんだけどさ。地位とか権力とか、そんなに魅力的？」

「ステータスは問題じゃないわ。藤白に生れた時点で、最初からある程度は持っているから。でもだからこそ、ゲームには参加すべきだわ。その権利を与えられているのに、ステージにも立たない方がおかしいのよ」

「門真の事？」

「そうよ！ あんな恵まれた環境にいて、それを活かさないなんて許せない」

恵まれてる……、かなあ。

「だから奪うの？」

「違うわね。最初から、あんな男には何も与えるべきじゃなかったの。藤白として、それを返してもらっただけ」

けど、と思う。

けど絢子、本当にそう？

確かに経済的には恵まれていただろうけど、幸せそうとは思えない。彼に流れる藤白の血は、むしろ門真を苦しめている。

「門真は、何も欲しがってない。言えばきくと、大抵のものはくれると思うよ」

「あきれた。判ってないわね」

うん。それは最近、よく言われる。

絢子は短く息を吐き出して、タイトなスカートから伸びる足をすらりと組んだ。椅子の背中に体を任せ、見下ろす様に顎を上げる。

「教えてあげる。流成はね、統轄のお気に入りなの。本人の意思は関係ないわ。統轄がそうさせたいと望んだら、必ずそうなるの」

例え門真がどんなに父親を憎んでも、全部捨てて逃げようとして
も。

まさかね。冗談でしょ。

そう言って笑い飛ばしたかったけど、できなかった。少し前ならそうしただろう。でも今は、それが門真の現実かも知れないと思えてしまう。

お気に入りだと絢子は言うけど、そこに愛しげな響きは感じない。もっと冷たく、もっと苦しい別の何かだ。

「……じゃあ、どうするの。門真の意思じゃ辞任もできないのに、どうやって辞めさせるの」

「恋人も守れずに、しかも女を助けるために出された条件を全部呑むなんて、最悪だと思わない？」

「条件飲むのは優しいでしょ」

「ばかね。甘いつて言うのよ。統轄は無能な人間が嫌いなもの。だから流成には、そうなってもらうわ」

要は統轄を失望させて、門真を放り出して貰おうと言うのだ。何だか、いやに簡単な話だ。

「本当にそうなら、いいよ」

心の底から出た言葉に、絢子は沈黙を返す。そして疑う様にこちらを見詰めた。

それで自由になれるなら、門真は無能なほうがいい。私を使っているなら、そうして欲しい。

「協力すると言っても言ってるの？」

「うーん。でも、ひとつ聞かせて。夏にね、本部長が襲われたの。あれ、絢ちゃん？」

雨の夜に受けた傷は結局縫って、門真の肩に傷痕を残した。もしあれも絢子がやった事なら、私には許すつもりさえない。

じっと眼を見て問うと、彼女は酷く驚いた様子で息を飲んだ。

「……違うわ」

この返事を聞いても、余り安心はできなかった。顔を伏せると、ストッキングに包まれた自分のつま先が眼に入る。馬鹿な質問をした。

この否定が嘘なら、私は門真を傷付けた人間に力を貸す事になる。

この否定を信じれば、彼にはまだ他に敵がいると言う事になる。身内の誰かだろう、と、絢子はひとり言の様に続けた。

門真は、愛人の子だ。本来藤白ではないはずの彼がいる事で、空席となるはずのポストがひとつ埋まる。それは自分の席だったと、逆恨みして門真を疎む者もいるのだと。

まるで、遠い世界の話のようだ。理解できない。何もできない。その癖、痛くて苦しかった。

「本気で、愛してるのね」

声に、弾かれる様に顔を上げる。

絢子は気付いてしまった真実を持て余す様に、自分の胸に拳を強く押し当てていた。そして当惑の表情を深くして、私を見詰める。愛してる？

誰が？ 私が？

誰を、と問う程は鈍くない。門真の事をだ。

首を傾げる。何で、そんな事を言い出したんだろう。

「急に、どうしたの」

「……狡いわね。鏡でも見せましょうか？ こんな目に遭っても能天気なくせに、流成の為にはそんな顔をするのね」

びっくりしちゃうじゃない、と絢子はグロスで光る唇を尖らせた。そんな顔って、どんな顔だろう。手首で束ねられた両手を、頬に当てる。私がのん気にしてられるのは、彼女の憎み切れないキャラが理由だ。それを比較対象にされても困る。

だけど絢子の率直な意見は、どうやら事実の様だった。熱くて甘い言葉がとろりと、指の先まで体を満たして舌尖に溢れた。

「そっか、愛しちゃってるんだ」

呟くのと同時に、両目からボロボロと涙が落ちた。

どうしよう。咄嗟に思う。門真はきつと、私を許さない。

いきなり泣き出した私に、絢子は慌てて席を立つ。その場でおろおろと足を迷わせ、それから怒った様にハンカチを突き付けた。

「なんで泣くのよ！ 冗談じゃないわ！」

「絢ちゃんは、いい子だなあ」

私の印象としては、これが正しい気がした。涙ひとつで動揺してしまうのだ。甘いのは、絢子だろう。そして、考えが足りない。

例えば洗成みたいに冷徹でないなら、拉致なんかやらかしても意味がない。恐らく、目的を達成するには至らないだろう。

……残念だ。門真を、自由にしたかった。

「好い子だなんて、ばかにしないで」

「してないよ。多分、それでいいんだと思う。ねえ、絢ちゃん。孤独だよ、門真は」

それだけは、私も知ってる。

腰掛けたベッドの上から、目の前に立つ絢子を見上げた。彼女は何の話か解らないと言うふうには、巻き髪を揺らしてこちらを見る。

絢子は若い。門真を恵まれていると言い放つそれは、幼さかも知れなかった。

「孤独を羨むのは、本当の孤独を知らないからだよ。でもそれは、罪じゃない。無理に、あの人たちの同類になろうとしないで」

絢子ははっと瞳を揺らし、ハンカチを握り締めた。そして抗うふうに言葉を探す。けれども何かが声になる前に、隣室に続く大きなドアが乱暴に開かれた。

「離れろ」

男の声が、厳しく命じる。

ドアの内側には、絢子の護衛がいたはずだ。しかし騒ぐ様子もない。チラリと見ると、彼らはすでに制圧されて両手を頭の上に上げていた。

ネクタイを緩めた、護衛たちと大差ない地味なスーツ。敵味方入り乱れた黒い服を背景に、でっかい人影は門真のものだ。

気付いて、慌てて俯く。あっちを見るんじゃないかと、後悔した。私は、どんな顔をしていたんだろう。こちらに向けた眼を見張り、息を詰めた彼の様子にそう思う。

他の人間を外に追い出し、ベッドルームのドアが閉まった。スト

ツキングのつま先に近く、門真が絨毯に膝を突く。

彼は私の腕をそっと押さえ、手首の拘束に小さなナイフの刃を当てる。プラスチックの紐を慎重に切り離し、顔を上げる。

距離が酷く近かった。俯く私の前髪が、その額に触れる程。

「ごめん」

困った様に、傷付いた様に。見上げて門真は、苦しげに言った。

「もう、こんな目にあわせないから」

――やめてよ。

聞きたくなかった。解ってた気がする。門真が、何て続けるか。

「終りにしよう。もっと前に、そうすべきだった。あの人がすすサ
ンに近付いた時点で、危険だって分ってたのに」

「嫌」

「すすサン」

また涙が零れそうで、硬く眼を閉じた。闇の中で呼ぶ声は、まるで論している様だ。

門真は、それでいいだろう。誰の事も必要じゃないから。それは知ってる。傍にいたいと願うのは、私だけ。

必要ないだけじゃなく、愛される事を拒む人だ。特別な感情を、許さない人だ。門真はこの気持ちを理解しないと、その事も私は知ってた。

隣にいられたのは、ただそれだけだったから。愛しもせず、疎みもせず。私は、そこにいるだけだったから。

もう、違う。私は愛した。

けど門真、ちゃんと殺すよ。愛してるなんて言わない。愛してなんて言わない。傍に置いて。隣にいさせて。

それだけでいいから。

「ごめん、すすサン。甘えて、巻き込んで。こんな事、すすサンには関係ないのに。もう良いんだ。だからもう、関わらない」

私の願いは届かない。

ひとりでいいと、とっくに門真は心に決めてる。

どうして、簡単に捨てられるんだろう。

無力な自分が悔しいか、離れてしまった心の距離が歯痒いか。あるいは、両方だったのだろうか。

衝動的に触れた。

体に触れるのは簡単だった。ひざまずく門真の髪に、唇で触れる。額に、頬に、顎のラインにキスを落として、最後に私と彼の唇を重ねた。

体を離すと、疎ましげな眼が私を射る。彼は立ち上がって距離を置き、二度と近付こうとしなかった。

……ああ。どうして私たちは、こんなにも違う人間なんだろう。

向けられた背中とは、拒絶のサインだ。

門真はそうして、愛を殺した。

4、冬は死にゆく愛の季節（二）

今更、気付く。門真はずっと、ひとりで生きられる様に準備していた。

あれは、そう言う事なんだろう。護衛並みに鍛えた体も、びっくりする程おいしい料理も。誰にも頼らず生きられる様に。

その癖、幽霊は気楽そうでいいなんて、寂しい事を言ったりするのだ。タバコ片手についてみたいに言った顔を、思い出すだけで胸が痛む。

思えば、誕生日の事もそうだ。門真がそれを嫌うのは、完全な自己否定だったと思う。

私はどれだけ、彼の事を見ていたのか。どれだけ、知らなかったのか。

私にも、孤独はある。両親共働きの鍵っ子で、帰る家はいつも空っぽ。よくある話だし、大した事じゃないよなって自分でも思う。けどふとした瞬間に、途方もない錯覚に襲われる事があった。夕暮れに薄く沈む部屋の中、世界にたったひとり残されたみたいなの。そんな訳ないと知っていたけど、それでも不安で、恐い様な気持ちが胸に沁み込んだ。

でも、これじゃ足りない。門真の中に、何があるのか。何がないのか。理解するのは難しかった。その深い孤独を、完全には理解できない。

どうして、私のものじゃないんだろう。

どうして、こんなに遠いんだろう。

門真を私の子宮に入れて、産み直したい。そしたら思い切り抱き締めて、愛せるのに。ひとりになんか、しないのに。

「だからって、なんで協力しなきゃいけないのよ!」

「感動したでしょ? ほら、一途な愛に」

にっこり笑い掛けると、絢子は信じられないとでも言うふう私

を見た。その顔は青ざめ、体は細かに震えている。心外過ぎて、声も出ないらしい。はっはっは。

「いやあ、因果応報って奴だね。絢ちゃん脇が甘いから、もう悪い事しないほうがいいよ」

十二月、公園に吹く風は冷たい。私はダウンコートを掻き合わせ、白い息を吐き出しながら真面目な顔を作ってた。

絢子は柔らかそうなカシミヤの下で、まだガタガタと震えている。金持ちは寒空と縁がないのか、彼女は基本的に薄着なのだ。

ここは、オフィス街の真ん中だ。呼び出したのは私だが、暖房の効いた場所にすればよかった。

片や高級ブランド。片やジーンズにスニーカー。正反対の二人が言い合っているのは面白いが、ちよっと目立つ。絢子も寒そうだし、早々に目的地に向かう事にしよう。

今日も綺麗にネイルの整った、冷え切った手を取る。

「じゃ、行こっか」

「行くってどこへよ。勝手にすれば好いじゃない」

「無理。私だけじゃ、入れないもん」

「どこへ行くつもりなのよ!」

さすがに何かを感じたらしく絢子は喚くが、無視して車に乗り込む。公園の入り口に無理やり駐車した高級車は、主の戸惑いとは裏腹になめらかに走り出した。

行き先は、「本社」だ。それを知って、絢子はますます顔色をなくした。

「なにをするつもりなのよ……」

「いや、ちよっと統轄に会おうかと思って」

「会えるわけないでしょう!」

並んで座った後部座席の隣から、もの凄い勢いで叱られた。

気軽に訪ねていきなり会える相手ではないし、統轄は何しろ忙しい。本社どころか、そもそも日本にいるかも怪しいのだ。

力説する絢子に、私はのんびりと返す。

「いや、いるいる。スケジュール確認したし。今日はね、三時から本社で会議に参加する事になってる」

時計を確かめると、午後二時よりまだ少し早い。確実なのは会議後だが、運がよければ会議前に会えるかも知れない。

計画に抜かりはない。だが絢子は、ネイルを輝かせて口元を押さえる。心なしか、眼が潤んでいる気がした。マスカラとアイラインは大丈夫だろうか。

「どうしてそんな事知ってるのよ……！」

「え、それ、本気で知りたい？」

聞き返すと、うっと怯んだあとで巻き髪がぶんぶんと横に揺れた。まあ確かに、彼女の気持ちも解る。私はこの計画を実行するために、かなりの無茶をした。

「あれ？ 柴町さん、今日休みですよね」

今日の午前中、会社で足を運んで最初に出会ったのは同じ課の後輩、内村だった。

思わずニヤリと顔が緩む。いきなり目的の人物に会えるとは、幸先がいい。

「ちょっとね、内村くんに頼みがあるの」

そう言ってにっこりと笑うと、内村は不思議そうに首を傾げた。

今年、新卒で警務部に採用されたのはひとりだけだ。つまり内村の同期だが、警務部は経験を重視するので新卒を採るのは珍しい。もしかやと思っただけで調べてみると、やはりデスクワークの情報管理担当だった。

まずいです。これほんと、まずいです。

半泣きで訴える内村を小突きながら案内させ、情報管理チームのオフィスを訪ねる。パソコンに繋がった大量のディスプレイの前で、くると椅子ごと振り返ったのは小柄な女の子だった。

彼女の特技は、ネットを通じて入ってはいけない所に入る事。見えてはいけないものを見ちゃう事。壊してはいけないものを壊す事。

要するに、私の情報源は彼女だ。「先輩からの理不尽な要求」と

言う社会人の武器を振りかざし、統轄のスケジュールや諸々の電話番号などを調べ上げた。個人情報保護法よ、さようなら。

運よく統轄が日本、それも本社にいと解ったが、どう考えても私ひとりでは本社にも入れない。そこで、一本の電話を掛けた。

「あ、元氣？ プーちゃ……」

『絢子だって言ってるでしょ！ どうしてこの番号知ってるのよ！』
これが約一時間前の事。

最初は相手にしなかった絢子も、私の「絢ちゃんさ、私の拉致の時、葉使ったでしょ。あれ、酷いよねえ。犯罪だもんねえ。これ、統轄に言ったらどうなるかなあ。庇ってくれるかなあ、統轄。いや、見捨てるよねえ、これ」と言う、熱心な説得によって協力を承諾してくれた。

藤白ジュニア世代の駄目な所は、全く人を信じない癖に妙に素直な所だと思う。

でもさすがに、いきなり統轄の所に連れて行けと言っても断られるに決ってる。そこで一旦、本社近くの公園に呼び出したのだ。

私が乗っ取る絢子の車が、本社の玄関前に滑り込んだ。大きなガラスのドアの前には、制服の警備員。私が单身討ち入ったとして、ビルにも入れず追い返されるのが落ちだ。

しかしその点、抜かりはない。しおしおと足を引き摺る絢子を盾に、これでもかと嚴重にしかれた警備を掻いくぐる。

ブランド服の背中をエレベーターに押し込んで、ほっと息をついたのも束の間。

チーンとのん気な音でドアが開き、その向こうから藤白洸成が現れた。

……そりゃ、いるよ。本社だもん。でも正直、ばったり会うのは想定外だ。こんなに大きい会社の中で、いきなりエレベーターで乗り合わすって。どんな偶然だよ。

「珍しい組み合わせだ」

洸成はチラリとこちらを一瞥し、秘書を伴いカゴに乗り込む。絢

子はギクリと体を強張らせ、慌てて私の体を引っ張った。自分と洗成の間に、壁として立たせるためだ。

冷たい銀フレームが、こちらを見下ろす。

「要件は」

「専務に用って訳じゃ、ないんですけど」

ああ、どうしよう。

顔には出してないはずだが、頭の中は動揺で煮えくり返るみたいだった。統轄に会う。その本心を隠しつつ、不自然さのない言い訳なんか思い付かない。

煮え切らない態度が気に入らないらしく、洗成はずっと眼を細めた。

「警備を呼ぶか？」

「えー、いいじゃないですか。キスまでした仲でしょ、私たち。セクハラで訴えられたくなかったら、見逃して下さい」

動揺のせいだ。考える前に、すらすらと口を突いて出た。

ボタンの並んだ操作盤の前で、洗成の秘書が堪え兼ねた様子で吹き出す。丸めた背中が、クックツツと笑って震えていた。

「岸本」

「……申し訳御座いません」

謝りながら、笑いを噛み殺す。洗成は不機嫌な眼を向けたが、それ以上は言わなかった。年齢も、岸本のほうが少し上だ。もしかすると、彼らの力関係は微妙な部分があるのかも知れない。

これはあとから思った事で、この時は絢子に肩を掴まれて「洗成にまで何をしてるのよ貴方は！」と、ガクガク揺すられ激しい責めを受けるのに忙しかった。

「あ、そうだ。ひとつ、聞きたかったんですけど」

目的の階に着いて、洗成はカゴから降りていた。見逃された形だが、訴訟を恐れたと言うより、単に興味がなかったんだろう。

閉まり掛けたドアを押さえ、去ろうとする背に声を投げる。

「あなたが門真を嫌うのは、本当にあなたの意思ですか？」

足が止まり、一呼吸の間を置いて振り返った。眼鏡のレンズ越しに、眼が眇められているのが解る。どう言う意味か、と。

「理由が見えないんですよね。後継者争いとかならまだ解りますけど、門真はとっくに勝負から抜けてるし」

「妾腹だ。理由はある」

「それが納得できないんです。よく解んないですけど、愛人とかその子供を嫌うのって、家族や家庭に愛着あるからじゃないんですか？　あります？　そんな人間らしい感情とか」

何しろ、見るからに冷血漢。氣に入らないからって苛める程、人に関心あるとは思えない。壊されたと恨む程、家族に執着する人だろうか。

目的のためには平気で人権踏みにじる癖に、自分だけ心柔らかなんて信じられない。

その辺、どうよ？　と、眉を歪めて問い掛ける。すると藤白一族とその秘書は、一様にきっぱり言い切った。

「ないな」

「ないわね」

「御座いません」

ほら、やっぱり。

私が正解。どいつもこいつも、問題ありげな一族だ。まともな人間の訳がない。

「面倒な所を突いてくれる。君は、あれより厄介だな」

それで？　と彼は問う。

「理由がなければ、どうなんだ。手を繋いで、仲よしごっこでもしろと？」

「それもいいですけど、専務は合理主義っぽいから。理由がないなら、門真に構う事もないでしょ？」

「守るつもりか。あれを」

「まあ、そうです。私は門真と一生付き合って行きたいから、敵は減らして置きたいんですね。それが問題みたいだし」

門真が私から離れたのは、もちろん執着が薄いと言う事も一因ではある。けれども、私に危険が及ばない様に。そのニュアンスが強い気がする。

止めるために押さえていた手を、エレベーターから離す。鉄のドアは両側からせり出し、中央で出会って閉じるタイプだ。

見る間に細くなって行くドアの隙間に、洗成の顔を見ながら私はボソリと呟いた。

「喧嘩を売るのは、統轄だけで手一杯ですよ」

4、冬は死にゆく愛の季節（三）

どこで聞き付けたのか、門真は慌てふためいて統轄のオフィスに飛び込んで来た。

「すずサン！」

「あれ。久しぶり、元氣そうね」

あのスイートルームの夜以来、彼は徹底的に私を避けた。元々、喫煙室以外の接点はない。私は実に簡単に、門真を失った。

だから、本当に久々の再会だ。まさかこんな所で会うとは思わなかったが、それはお互い様——と言うか、あちらのほうが驚いているに違いない。

革張りのソファから、肩で息する大きな男を見上げて問う。

「統轄に用事って感じじゃないけど……。あ、もしかして、止めに来た？」

「そうだよ！」

なら、遅い。もうすでに、喧嘩の売買は成立してしまっていた。

応接セットがあり、奥に大きなデスクがある。配置や規模は洸成のオフィスと大差ないが、黒やダークブラウンが基調の部屋は重厚な印象だ。

デスクで秘書から差し出される書類に次々サインし、顔も上げずに統轄が口を開く。

「流成。こんな嫁は、苦勞すると思うよ」

「……誰が嫁ですか」

「えー、私でしょ」

誰か他に心当たりがあるのかと、むっと眉をひそめる。すると門真は、叱り付ける様に言いながら私の腕を取った。

「すずサン！ ……とにかく、行こう」

こっちの用は済んだから、それは構わない。次にすべきなのは、門真と話す事だ。腕を掴む手に従って、立ち上がる。

重そうなドアを、統轄の秘書が開いてくれた。それを通り抜けると同時に、背後から声が掛けられる。

「柴町さん。いずれ、またお会いしましょう」

すぐに振り返ったが、扉はすでにボタンと閉じるところだった。いずれ、また。

「何か、恐い台詞だなあ」

小声で零すと、門真は耳を疑う様な、それとも呆れた様な複雑な顔で私を見た。

「怖いに決ってるよ、統轄は。ケンカ売るバカは、まずいない」

「だって、他に思い付かなかったんだもん。しょうがないじゃない」
エレベータに向かって歩きながら、きよろきよろと辺りを見回す。
だが、探すべき人影はない。

「何？」

「絢ちゃん知らない？」

彼女は、統轄に会わなかった。と言うか、会わずに済んだ。

この階に着いてみるとすでに私の目的はばれていて、すぐに護衛や秘書に囲まれてしまった。何の気まぐれか私はオフィスに通されたが、絢子は外に残されたのだ。そのあと、どうなったかは解らない。

「あア、逃げたよ」

チーンとのん気な音に重ねて、あっさりと言った。開いた鉄の扉に入り、彼は一階のボタンを押しながら続ける。

「電話があっただよ、すぐサン止めろって。来た時にはもういなかったけど」

心配してくれた——って事では、ないんだろうな。やっぱり。

絢子は多分、統轄への反逆とは知らずに協力してしまった事を恐れたんだろう。大嫌いな門真を引っ張り出しても、何とか私を止めたかったらしい。

「そっか、それでいるんだ」

「うん、そうなんだけど……」

彼が統轄の部屋に、慌てて飛び込んで来た経緯は解った。だが当の本人は、どうも釈然としない様子だ。

「だけど？」

「兄さんからも、電話あったんだよね……」

「え、藤白兄？ 何て？」

「おもしろい事になってるけど、良いのかって」

思わず吹き出した。あの冷血動物が、どんな顔で言ったんだろう。その時の気分を思い出したのか、門真は何とも居心地悪げな表情を見せる。

「電話とかあったの、初めてなんだけど……。すずサン、あの人も何かした？」

「何もしてないよ」

ちよつとだけ、話しはしたけど。

あれだけの事で、洗成が変わると思えなかった。人は変わってしまうけど、変えようとするのは難しい。だけど一応、考えてくれたかも知れない。

感情を抜きにしてみると、――洗成には多分、そんなものないと思うけど。やはり門真は放って置くべきなのだ。藤白一族の覇権争いからは、抜けたがってるんだから。わざわざ刺激して、敵対させる事はない。

私としては、洗成にそう考えて欲しかった。そのために疑問を投げたのだ。こっちのほうが合理的だよ、と。

淡い期待だったけど、もしかすると、ちよつと成功したんじゃないの？

ほんと、妙な所が素直だよね。藤白ジュニア世代。

滲んだ涙を指先ですくい、ひとり満足してウヒヒと笑った。

エレベータは一階に着き、のん気な音でドアが開く。と、広がる視界はほぼ黒い。

ビルに配置された制服の警備員に囲まれて、見慣れた警護課の黒スーツが何人も見える。門真の護衛だとしたら、数が多過ぎはしな

いだろうか。

私たちに気付いて、幾つかの顔がこちらを向いた。その中のひとつ、相模が浮かべているのは悔恨だろう。彼に向け、ニヤリと笑ってピースサインを送る。

わあ、嫌そうな顔。ざまーみろ。

現在、私たちの間にはちょっとした溝があった。事の起こりは、今回の計画に端を発する。

門真の拒絶に、門真の別離に落ち込んで、それから余りの勝手さに腹が立った。どこまで私の意思を無視すれば気が済むんだ、あの一族は。

そして最初に考えたのは、相模を味方に付けようと言う事だった。何しろ相手は、享樂怪獣改め狂犬ロマンチスト相模。一方的に切り離された私の恋心を明かし、涙のひとつでも見せれば同情される事間違いなしだ。

そのはずだった私のプランは、しかしあっけなく失敗した。相模は門真の側に付いたのだ。

まあ彼は、本部長である門真の警護担当だ。当然と言えば当然だが、だからこそ味方に欲しかった。門真の様子を知るために。

納得もできなかった。愛が全てみたいな事を言ってた癖に、恋する女に協力しないなんてどう言う理屈よ。

「だって本部長がああしたのって、柴町さん守りたいからでしょ？ スッゲー愛してるから、自分の気持ち殺すんッスよ。その邪魔はできないッス」

彼は言う。問い詰める私に対抗し、強い決意を示す顔で。ねえ、相模。でもそれ言っちゃ駄目なんじゃないの。

ちなみに当初、藤白統轄に喧嘩を売ると言う極めて頭の悪そうな計画はなかった。あとになってこれが候補にあがったのは、そんな事を聞かされたせいだ。

すっげー愛が門真にあるなら、もう何も恐くない。

幼い事を本気で思う。何でもできるって気分になるけど、酷く不

安定な勇気だとも知っていた。

だって私は何ひとつ、門真の口から聞いてない。

「それ、なくしたと思ってた」

ダウンジャケットを着たままで、床の上にぺたりと座って門真を見上げた。

本社を離れ、ここは私たちの会社だった。暖房が入っていないらしく、地下の資料室はとても寒い。

彼は立って壁にもたれ、くわえたタバコに銀色のライターを近付けるところだ。そのライターは、以前私にくれた物だった。

門真は今その事に気付いた様に、チラリと手の中を確かめる。

「あア……。前、すずサン探してる時に見付けたんだ」

言って、タバコにチリチリと火を点ける。

懐かしい気がして、嬉しくて寂しくて切なくなった。以前は、当たり前だったのに。

この喫煙室に来るのも、久しぶりだ。私を避けて門真が姿を見せなくなったので、それがつらくてこっちまで足が遠のいた。

私たちが出会った場所だ。決着を付けるなら、ここしかない。そう言うつもりで、門真を強引に引っ張って来た。

だけど、何から話せばいいんだろう。どうやって伝えたらいいんだろう。

門真、この胸を切り開いて見せたいよ。喉の奥でつかえるみたいに、速く高く、心臓が鳴ってる。

不安で、愛しくて、そうなるんだよ。

「好きだよ、門真」

口にできたのは、結局それだけ。子供でも思い付く台詞だけど、これが私の精一杯だ。

タバコを挟んだ男の指が、強張る様に微かに揺れた。そしてあの疎ましげな表情が、圧する様にこちらを見下ろす。

座っててよかった。足が震えそうだ。正直、統轄の前に出るより緊張してる。

「知ってたでしょ？」

「……すずサンは、厄介な事には関わらない人だと思ってたよ」

「そうね。確かに、面倒は嫌い」

「統轄とケンカするのは、すぐく面倒だと思うけど」

「うん。だけど、しょうがないの。私、ティラミスが好きって話したっけ？」

話題の飛躍に、門真は歪めた眉の下で眼を大きくした。

「あア……、コンビニの」

「そう、門真の次に愛してる奴ね。あれ食べたら、大抵の事は許せるんだけどさ。最近、駄目なの。門真がいないと、味もよく解んない。今までひとりで、どうやって生きてたか忘れちゃった」

見上げると、どこか悲しい様な門真の視線にぶつかった。ふと思う。私のしている事は、余計に彼を苦しめているだろうか。

心が大きく揺らいだが、でも、伝えるくらいは許して欲しい。

門真がそれを要らないって言うなら、今度こそちゃんと殺すから。この気持ちを全部ぶつけて、体ごと砕けたっていいから。

愛してなんて言わない。

「隣にいて。それだけでいい」

「……そんな事、言う人じゃなかったでしょ」

門真はろくろく口にしないまま、落ち着かない仕草でタバコを揉み消す。その表情が陰しく見えて、胸がぎゅっと痛くなった。

「言っちゃ駄目？　人は欲に溺れるけどさ、恋に溺れても狂うらしいよ」

「溺れてるのは、俺だけだと思ってた」

今、何て？

確かめる間もなく、下りて来た門真の体が私の全部を抱き締めた。押し付けて来るスーツから、煙の匂いが辛く香る。門真の匂いだ。

空っぽだった胸一杯に、熱いくらいの何かが満ちる。

ああ、もう、どうでもいいや。

顔が見たいけど、聞きたい事がある気がするけど、離れるのが嫌

だ。このままがいい。

しばらくして、門真が少しだけ体を離した。酷く近い所から、黒い眼が見詰める。――初めて知った。本当に、瞳は愛を宿せるんだ。「知ってたら、離さなかったのに」

「私が好きじゃないなんて、どうして思ったりしたの。ちゃんとキスしたじゃない」

もう関わらないと、門真が告げたあの夜に。愛しくて寂しい、衝動的なあのキスを。一体何だと思ったのか。

言うとは、ずっと冷たく眼を細めた。門真、それ、洸成に似てる。ちよつと恐い。

「ずずサンのキスは、アテにならない。兄さんともしたし、相模にもキスしようとしたでしょ」

「……した」

兄のは不可抗力で、相模のは未遂だけど。事実だ。言い訳も出ず、頭を抱えた。

と、門真がそつと息を零す。

「俺は敵が多いから、巻き込みたくなかったのに……。まさか、こんな事までするとはね。統轄にケンカ売っちゃうような人、俺以外に守れないよね」

愛に狂って、と言うべきだろう。

統轄を敵にする事で、示したかった。私は、何も恐くないと。何かあっても、それは私が招いた事だと。

でも、こんな反応、予想してない。最悪、拒絶。でなきゃ、黙殺がいいところだと思ってた。

なのに門真の浮かべるほほ笑みは、驚く程に甘いのだ。

「……好きで、いいの？ 門真は、自分の事好きな人、嫌いでしょう？」

私の問いに、彼は驚いた様に眼を開く。

「何でそんな事知ってんの。まア、そうだけど。でも好きになったの、絶対俺が先だから。一番大事な人に好かれたら、嬉しいでしょ」

「何それ……。なのに、私を離れたの？」

だとしたら本当に、私を守るために門真は気持ちを殺したんだ。自分を切り裂く様にして、拒絶したんだ。

胸が潰れそうになる。

そんな人を、私は責めてた。

「そうだよ。せっかくガマンしてたのに。……もう、ムリだからね」
「無理？」

「離せない」

唇は耳元に、熱っぽく囁く。

この男は、誰だろう。

こんな門真は、知らない気がする。わがままで、優しくて。まるで甘えてでもいる様に、彼は私に深く触れた。

それも嬉しいって思うから、私は本当馬鹿みたいだ。

私たちには、問題が山積み。門真は藤白一族に嫌われてるし、私は統轄の敵になった。これからは多分、嘘みたいにトラブルだらけの日々になる。この予感、きっと当たる。

だけどそんな事は、どうでもいい。

喫煙室の床に崩れて、今は互いの存在だけが全てだった。

「ね、門真。愛してるって、解ってる？」

「あア、コンビニのティラミスより。でしょ」

いたずらっぽく門真は笑って、あたたかな息を私の胸にクスクスと落とす。

ああ本当にそうだよねって、真剣に思った。

だって何より甘ったるくて、私を満たしてくれるのは門真だけだ。解ってないだろうなあ……。

脳が膿んだみたいに熱を持って、頭のネジが緩んでる。ぼうつとしちゃって、何でもないのに泣きそうだ。こんな気持ち、伝わる訳ない。

苦しいくらい腫れ上がった感情に、堪らず彼の頭を引き寄せる。唇で白髪混じりの髪に触れ、ドキリとした。見詰める瞳の色が深く

て、飲まれそうだ。

呼吸さえも感じる距離で、ふと笑みを消して男が願う。

「すずサン、もっと俺に溺れてよ」

いいよ。

それなら、幾らでも叶えられる。

(了)

Copyright (C) 2011 mikumo.
All rights reserved. A

4、冬は死にゆく愛の季節(三) (後書き)

最後まで読んで頂き、ありがとうございました。

感想、ご指摘など頂けますと幸いです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4482q/>

冬は死にゆく愛の季節

2011年2月7日14時10分発行